

※咳払い・息継ぎ・誤句(言い直しがあつたときの言い直す前の語句)・ファイラー(「え」「えー」「ま」「まあ」「で、」などの大意ない間投詞)は、最初から省きました。

文字起こし原稿

推敲過程

かさおか掲載用原稿

<p>大教会長様 開講挨拶 教祖140年祭本部巡教の開講にあたりご挨拶いたします。</p>	<p>大教会長様 開講挨拶 教祖140年祭本部巡教の開講にあたりご挨拶いたします。</p>	<p>大教会長様 開講挨拶</p>
<p>本日は、井筒梅夫先生をお迎えして、今、この場にいる皆様方ともどもに、本部巡教を受けさせていただきますことは、本当にありがたいことだと思わせていただいております。</p>	<p>本日は、井筒梅夫先生をお迎えして、今、この場にいる皆様方ともどもに、本部巡教を受けられることだと思わせていただいております。</p>	<p>本日は、井筒梅夫先生をお迎えして、今、この場にいる皆様方ともどもに、本部巡教を受けられることは、本当にありがたいことだと思えます。</p>
<p>皆さんご存知の通り、去る10月28日に真柱様より「諭達第四号」をご発布いただきました。そのとき、私は</p>	<p>皆さんご存知の通り、去る10月28日に真柱様より「諭達第四号」をご発布いただきました。そのとき、私は</p>	<p>去る10月28日に真柱様より「諭達第四号」をご発布いただきました。そのとき、私は西礼拝場結界内の一番</p>
<p>ご本部の神殿、西の礼拝場の結界の中、それも一番南に近いところに、直属の会長として座って参拝をさしてもらっておりました。非常に申し訳ないことに、非常に、失礼なことだと思っておりますが、この度の「諭達」は、表統領先生が代読されるのだろうか、内統領先生が代読されるのだろうか、そんなふうにしてしまっておりまして。</p>	<p>ご本部の神殿、西の礼拝場の結界の中、それも一番南側に近いところに、直属の会長として座って参拝をさしてもらっておりました。非常に申し訳ないことに、非常に、失礼なことだと思っておりますが、この度の「諭達」は、表統領先生が代読されるのだろうか、内統領先生が代読されるのだろうか、そんなふうにしてしまっておりまして。</p>	<p>この度の「諭達」は、統領先生が代読されるのだろうかと思つていましたが、おつとめを終え、真柱様が、お付きの方に伴われながらゆつくりとお席に着かれて、そして、直接、この「諭達第四号」を私たちにお示しく下さいました。</p>
<p>ですが、当日のおつとめを終えて、真柱様が、お付きの方に伴われながらゆつくりとお席に着かれて、そして、直接、この「諭達第四号」を私たちにお示しく下さいました。</p>	<p>ですが、当日のおつとめを終えて、真柱様が、お付きの方に伴われながらゆつくりとお席に着かれて、そして、直接、この「諭達第四号」を私たちにお示しく下さいました。</p>	<p>その姿を拝見して、この時旬に、道の芯である真柱様から、直接、この「諭達」をお聴かせいただけると、思わず、涙がこぼれました。「諭達」を、お言葉を、直接、拝聴しながら、私の胸に湧き上がってきた</p>
<p>その姿を私は見させていただいて、「あ、ありがたいな」と、この時旬に、真柱様から、道の芯である真柱様から、直接、この「諭達」をお聴かせいただけると。思わず、結界の中で、涙がこぼれました。「諭</p>	<p>その姿を私は拝見させていただいて、「あ、ありがたいな」と、この時旬に、真柱様から、道の芯である真柱様から、直接、この「諭達」をお聴かせいただけると。思わず、結界の中で、涙がこぼれました。</p>	<p>その姿を拝見して、この時旬に、道の芯である真柱様から、直接、この「諭達」をお聴かせいただけると、思わず、涙がこぼれました。「諭達」を、お言葉を、直接、拝聴しながら、私の胸に湧き上がってきた</p>

達」を、直接、聴かせていただきながら、また、お言葉を、直接、聴かせていただきながら、私の胸に湧き上がってきたのは、とにかく、今、聴かせていただいている「諭達」に込められたをやの思いに添いきらしていただきたい。そして、お喜びいただきたい。そのことを、そのとき、強く強く感じました。

その思いを実現するためにも、今日、この日の本部巡教は、とても大切な時間でございます。今からお聴かせいただくお話を、しっかりと胸に納めさせていただきます。年祭活動へと向かう大きな勇みとしていただきたいと、そのように思います。

そして合わせて、ここにいる皆さん方は、それぞれ土地処での信仰の中心となられる方が、ここにお集まりいただいていると思います。この本部巡教で得た気付きを勇みを、巡教を終えてから、それぞれの土地処にお帰りになられたときには、自分の身近な方たちにしつかりと、今日得た気付きと勇みをまた喜びを、お伝えしていただけるようお願いをさせていただきます。私の開講の挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

★本部巡教講話

それでは、「諭達」の拝読をさせていただきます。

(拍手) 「諭達第四号」 拝読(拍手)

皆さま方には、日ごろ、それぞれ教会の大切なお立場のうえから、たすけ、一条のうえにお励みくださいまして、大変ご苦勞様でございます。また、今日は、こう

「諭達」を、直接、聴かせていただきながら、また、お言葉を、直接、~~拝聴~~かせていただきながら、私の胸に湧き上がってきたのは、とにかく、今、聴かせていただいている「諭達」に込められたをやの思いに添いきらしていただきたい。そして、お喜びいただきたい。そのことを、そのとき、強く強く感じました。

その思いを実現するためにも、今日、この日の本部巡教は、とても大切な時間でございます。今からお聴かせいただくお話を、しっかりと胸に納めさせていただきます。年祭活動へと向かう大きな勇みとしていただきたいと、そのように思います。

そして合わせて、ここにいる皆さん方は、それぞれ土地処での信仰の中心となられる方が、ここにお集まりいただいていると思います。この本部巡教で得た気付きを勇みを、巡教を終えてから、それぞれの土地処にお帰りになられたときには、自分の身近な方たちにしつかりと、今日得た気付きと勇みをまた、喜びを、お伝えしていただきますようお願いをさせていただきます。私の開講の挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

★本部巡教講話

それでは、「諭達」の拝読をさせていただきます。

(拍手) 「諭達第四号」 拝読(拍手)

皆さま方には、日ごろ、それぞれ教会の大切なお立場のうえから、たすけ、一条のうえにお励みくださいまして、大変ご苦勞様でございます。また、今日は、こう

のは、とにかく、「諭達」に込められたをやの思いに添いきらしていただきたい。そして、お喜びいただきたい。そのことを、そのとき、強く強く感じました。

その思いを実現するためにも、今日、この日の本部巡教は、とても大切な時間です。今からお聴かせいただくお話を、しっかりと胸に納め、年祭活動へと向かう大きな勇みとしていただきたい。

そして、自分の身近な方たちにしつかりと、今日得た気付き・勇み・喜びをお伝えいただきますようお願い申し上げます。

★本部巡教講話

して、本部巡教にお集まりいただきまして、誠にあり
がとうございます。

去る10月28日、ご本部の秋季大祭において、真柱様よ
り直々に「諭達第四号」をご発布いただきました。

今、拝読させていただいたこの「諭達」の冒頭に、
立教百八十九年、教祖百四十年祭を迎えるにあたり、
思うところを述べて、全教の心を一つにしたい。

とあります。

全教よふぼく・信者が「諭達」の精神に心を一つに結
んで教祖150年祭を目指す年祭活動が、いよいよ始動
いたします。

そこで、このたびの本部巡教では、まず教会長さん方
を始め、教会の主立つ方々に、「諭達」に込められて
いる精神と年祭活動の意義をお伝えして、全教一、手一
つの成人の歩みを進めようというのが、その目的であ
ります。

そこで、この講話では、皆さんとともに、「諭達第四
号」の精神をまず心に納めて、これから教祖の年祭に
向かう私たちの歩みについて考えていきたいと思いま
す。

どうぞお聴き取りのほど、よろしくお願いをいたしま
す。
(拍手)

どうぞ、脚はお楽にして聴いてください。どうぞ。ど
うぞ。さあ、どうぞ。痺れたら、話、聴けなくなりま
す。どうぞ、お楽に聴いてください。

実は、私、この8月にコロナに罹患しまして、それ以
来、ちよつと喉の調子が、やつぱ喉が細くなつてきて
んのか、ちよつと、大きな声も出にくいですし、元々

して、本部巡教にお集まりいただきまして、誠にあり
がとうございます。

去る10月28日、ご本部の秋季大祭において、真柱様よ
り直々に「諭達第四号」をご発布いただきました。

今、拝読させていただいたこの「諭達」の冒頭に、
立教百八十九年、教祖百四十年祭を迎えるにあたり、
思うところを述べて、全教の心を一つにしたい。

とあります。

全教よふぼく・信者が「諭達」の精神に心を一つに結
んで教祖150年祭を目指す年祭活動が、いよいよ始動
いたします。

そこで、このたびの本部巡教では、まず教会長さん方
を始め、教会の主立つ方々に、「諭達」に込められて
いる精神と年祭活動の意義をお伝えし、全教一、手一
つの成人の歩みを進められるようにしたいのが、その
目的であります。

そこで、この講話では、皆さんとともに、「諭達第四
号」の精神をまず心に納め、これから教祖の年祭に
向かう私たちの歩みについて考えていきたいと思いま
す。

どうぞお聴き取りのほど、よろしくお願いをいたしま
す。
(拍手)

どうぞ、脚はお楽にして聴いてください。どうぞ。ど
うぞ。さあ、どうぞ。痺れたら、話、聴けなくなりま
す。どうぞ、お楽に聴いてください。

実は、私、この8月にコロナに罹患しまして、それ以
来、ちよつと喉の調子が、やつぱ喉が細くなつてきて
んのか、ちよつと、大きな声も出にくいですし、元々

去る10月28日、ご本部の秋季大祭において、真柱様よ
り直々に「諭達第四号」をご発布いただきました。

「諭達」の冒頭に、
立教百八十九年、教祖百四十年祭を迎えるにあたり、
思うところを述べて、全教の心を一つにしたい。

とあります。

全教よふぼく・信者が「諭達」の精神に心を一つに結
んで教祖150年祭を目指す年祭活動が、いよいよ始動
します。

そこで、この本部巡教で、まず教会の主立つ方々に、
「諭達」に込められている精神と年祭活動の意義をお
伝えし、全教一、手一つの成人の歩みを進められるよう
に、皆さんとともに、「諭達第四号」の精神をまず心
に納め、これから教祖の年祭に向かう私たちの歩みに
ついて考えていきたい。

喉が強い方ではありませんので、聞き取りにくいこと
もあるかも知れませんが、それはひとつご容赦いた
だきたいと思えます。

教祖年祭の意義

さて、「教祖の年祭を勤める意義」について、「諭達」
の中に、
教祖の親心にお応えすべく
とあります。

教祖の親心にお応えすべく、よふぼく一人ひとりが教
祖の道具衆としての自覚を高め、仕切つて成人の歩
みを進めることが、教祖年祭を勤める意義である。
とはつきり教えていただいております。教祖の親心
にお応えさせていただくということです。

そういう意味で、まずは、この「教祖の親心」につい
て思案をしたいと思えますが、この「諭達」の中に、
子供の成人を急ぎ込まれ、定命を縮めて現身をかく
された

これも親心の一つとして記されています。

これが年祭の元一日ですね。

ここに籠る「教祖の親心」を少し考えてみたい。

教祖年祭の元一日

教祖は世界たすけの元立てとしてよろづだすけのご守
護をくださるおつとめを教えてくださいました。この
おつとめをしなければ、他のところでどれだけ頑張っ
ても、陽気ぐらひは実現しませんね。つまり、おつと

喉が強い方ではありませんので、聞き取りにくいこと
もあるかも知れませんが、それはひとつご容赦いた
だきたいと思えます。

教祖年祭の意義

さて、「教祖の年祭を勤める意義」は、
「諭達」の中に、
教祖の親心にお応えすべく
とあります。

教祖の親心にお応えすべく、よふぼく一人ひとりが教
祖の道具衆としての自覚を高め、仕切つて成人の歩
みを進めることが、教祖年祭を勤める意義である。
とはつきり教えていただいております。教祖の親心
にお応えする」
とさせていただきます」というこ
とです。

そういう意味で、まずは、この「教祖の親心」につい
て思案をしたいと思えますが、この「諭達」の中に、
子供の成人を急ぎ込まれ、定命を縮めて現身をかく
された

これも親心の一つとして記されています。

これが年祭の元一日ですね。

ここに籠る「教祖の親心」を少し考えてみたい。

教祖年祭の元一日

教祖は世界たすけの元立てとしてよろづだすけのご守
護をくださるおつとめを教えてくださいました。
このおつとめをしなければ、他のところでどれだけ頑
張っても、陽気ぐらひは実現しませんね。つまり、

教祖年祭の意義

「教祖年祭を勤める意義」は、「諭達」に、

教祖の親心にお応えすべく、よふぼく一人ひとりが教
祖の道具衆としての自覚を高め、仕切つて成人の歩
みを進めることが、教祖年祭を勤める意義である。
とはつきり示される通り、「教祖の親心にお応えする」
ということです。

そこで、まずは、「諭達」に、
子供の成人を急ぎ込まれ、定命を縮めて現身をかく
された
と記される年祭の元一日に籠る「教祖の親心」を少し
考えてみたい。

教祖年祭の元一日

教祖は世界たすけの元立てとしてよろづだすけのご守
護をくださるおつとめを教えてくださいました。このおつと
めをしなければ、他でどれだけ頑張っても、陽気ぐら
ひは実現しない。おつとめこそ、天理教の生命線です

めこそ、天理教の生命線です。ですから、教祖は終始おつとめを急き込まれる。

しかし、初代真柱様や先人の方々は、おつとめをすれば、官憲がご高齢の教祖を警察や監獄へ連行するわけですから、人々は、教祖のお体を案じて、おつとめに掛かれなかつたんですね。しかし、教祖はその中でも厳しくおつとめを実行急き込まれます。

そして明治20年正月26日、いよいよ教祖のご身上が迫られたので、初代真柱様の固い決心の元、一堂腹を括って白昼堂々とおつとめを勤めたところ、奇跡的に一人の警官も来なかつたのですが、十二下りの終わる頃に、教祖は現身を隠されました。これが、私たちがお互いによく知っている教祖の年祭の元一日であります。

先人方は、教祖の仰せに従っておつとめを勤められた。なのに教祖はお姿を隠されたんです。何故でしょう。正月26日のおつとめは勤めることができました。しかし、もし教祖が、そのままおられたらどうでしょう。多分、人々は、その先も教祖の御身を案じておつとめをすることを躊躇するはずです。姿ある限り、十分におつとめはできないだろう。そこで、26年定命をお縮めになられ、お姿を隠された。

すなわち、子供たちが安心しておつとめが勤められるように、親心のうえからお姿をお隠し遊ばされたんです。

また、人間思案を捨てておつとめを勤めることができただから、これからは皆一人立ちをして、神一条の道を通ってくれと、その成人を促される親心からでも

おつとめこそ、天理教の生命線です。ですから、教祖は終始おつとめを急き込まれる。

しかし、**②**初代真柱様や先人の方々は、**①**おつとめをすれば、官憲がご高齢の教祖を警察や監獄へ連行する。~~わけですから、人々は、~~**③**教祖のお体を案じて、おつとめに掛かれなかつたんですね。しかし、教祖はその中でも厳しくおつとめを実行急き込まれます。

そして明治20年(陰曆)正月26日、いよいよ教祖のご身上が迫られた。めで、初代真柱様の固い決心の元、一堂腹を括って白昼堂々とおつとめを勤めたところ、奇跡的に一人の警官も来なかつたのですが、十二下りの終わる頃に、教祖は現身を隠されました。これが、~~私たちがお互いによく知っている~~教祖の年祭の元一日であります。

先人方は、教祖の仰せに従っておつとめを勤められた。なのに教祖はお姿を隠された~~はず~~。何故でしょう。正月26日のおつとめは勤めることができました。しかし、もし教祖が、そのままおられたらどうでしょう。多分、人々は、その先も教祖の御身を案じておつとめをすることを躊躇するはず~~です~~。姿ある限り、十分におつとめはできないだろう。そこで、26年定命を~~お縮めて~~~~は~~~~な~~られ、お姿を隠された。

すなわち、子供たちが安心しておつとめが勤められるように、親心のうえからお姿をお隠し遊ばされた~~の~~です。

また、人間思案を捨てておつとめを勤めることができただから、これからは皆一人立ち~~し~~て、神一条の道を通ってくれと、その成人を促される親心からでも

から、教祖は終始おつとめを急き込まれる。

しかし、おつとめをすれば、官憲がご高齢の教祖を警察や監獄へ連行する。初代真柱様や先人の方々は、教祖のお体を案じて、おつとめに掛かれなかつた。しかし、教祖はその中でも厳しくおつとめを実行急き込まれます。

そして明治20年(陰曆)正月26日、いよいよ教祖のご身上が迫った。初代真柱様の固い決心の元、一堂腹を括って白昼堂々とおつとめを勤めたところ、奇跡的に一人の警官も来なかつたが、十二下りの終わる頃に、教祖は現身を隠された。これが、教祖の年祭の元一日です。

先人方は、教祖の仰せに従っておつとめを勤めた。なのに教祖はお姿を隠された。何故でしょう。正月26日のおつとめは勤めることができました。しかし、もし教祖が、そのままおられたらどうでしょう。多分、人々は、その先も教祖の御身を案じておつとめをすることを躊躇するはず。姿ある限り、十分におつとめはできないだろう。そこで、26年定命を縮めてお姿を隠された。

すなわち、子供たちが安心しておつとめが勤められるように、親心のうえからお姿をお隠し遊ばされたので

す。また、人間思案を捨てておつとめを勤めることができただから、これからは皆一人立ちして、神一条の道を通ってくれと、その成人を促される親心からでもあ

あります。

こうした親心から、教祖は定命を59年縮めてまで、現身をお隠し遊ばされたわけです。

この教祖の親心は、私には、究極の親心であると映ります。――親というものは、子供の身上が危ない状態になれば「私の命を何年削ってくださいって結構でございます」と、「その代わり、何卒この子の命をおたすけくださいませ」と、親神様にすがるぐらいのことはするものです。これは子を思う親心ですね。でも、残り寿命の全てを引き換えてまでとはなかなかいかないものだと思います。ましてやよふぼく・信者さん、つまり理の子の成人を促すために、我が身を引き取ってもらうような心定めなどできるものではないでしょう。これを思えば、教祖の後に続く人々が、安心して神様の道を通れる、歩めるようにと、定命を59年お縮めくださった教祖の親心は、私には、究極の親心であると思えてなりません。

存命の理

そして、教祖はお姿を隠されてからは、「存命の理」をもってお働きくださるようになりました。それまではお道の前面に立ってくださいっていた教祖は、陰に回り、目には見えない「存命の理」として、世界たすけの先頭にお立ちくださることになりました。

そして、「存命の理」の世界は今も続いており、これから先も悠久に続いていくのであります。

教祖が現身を隠された元一日は、ひながたの道が完結

あります。

こうした親心から、教祖は定命を59年縮めてまで、現身をお隠し遊ばされたわけです。

この教祖の親心は、私には、究極の親心であると映ります。――親というものは、子供の身上が危ない状態になれば「私の命を何年削ってくださいって結構でございます」と、「その代わり、何卒この子の命をおたすけくださいませ」と、親神様にすがるぐらいのことはするものです。これは子を思う親心ですがね。でも、残り寿命の全てを引き換えてまでとはなかなかいかないものだと思います。ましてやよふぼく・信者さん、つまり理の子の成人を促すために、我が身を引き取ってもらうような心定めなどできるものではないでしょう。これを思えば、教祖の後に続く人々が、安心して神様の道を通れる、歩めるようにと、定命を59年お縮めくださった教祖の親心は、私には、究極の親心であると思えてなりません。

存命の理

そして、教祖はお姿を隠されてからは、「存命の理」をもってお働きくださるようになりました。それまではお道の前面にお立ちくださるようになっていた教祖は、**お姿を隠されてからは、**陰に回り、目には見えない「存命の理」として、世界たすけの先頭にお立ちくださることになりました。

そして、「存命の理」の世界は今も続いており、これから先も悠久に続いていきますのであります。

教祖が現身を隠された元一日は、ひながたの道が完結

ります。

こうした親心から、教祖は定命を59年縮めてまで、現身をお隠し遊ばされたわけです。――親というものは、子供の身上が危なければ「私の命を何年削ってくださいって結構です。その代わり、この子の命をおたすけください」と、親神様にすがるぐらいのことはするものです。これは子を思う親心ですが、残り寿命の全てを引き換えてまでとはなかなかいかないものです。ましてやよふぼく・信者、つまり理の子の成人を促すために、我が身を引き取ってもらうような心定めなどできるものではないでしょう。これを思えば、教祖の後に続く人々が、安心して神様の道を通れる、歩めるようにと、定命を59年お縮めくださった教祖の親心は、私には、究極の親心であると思えてなりません。

存命の理

それまで、お道の前面にお立ちくださった教祖は、お姿を隠されてからは、陰に回り、目には見えない「存命の理」として、世界たすけの先頭にお立ちくださることになりました。

そして、「存命の理」の世界は今も続いており、これから先も悠久に続いていきます。

教祖が現身を隠された元一日は、ひながたの道が完結

した日であり、それはまた、「存命の理」として新たなたすけの世界へ扉を開かれた元一日でもあります。教祖はひながたの道中、幾重難難苦勞の道を行んでくださったのは、可愛い子供たちをたすけたい、陽気ぐらしへ導いてやりたいという親心に他なりません。

教祖のひながたの30年には、この親心が一貫して流れてますね。そして、ひながたの道は、定命を縮めてまで子供の成人をお促しくださった親心で締め括られています。

さらには、この親心は、存命の教祖の親心として、今も、私たちをお守りくださっています。そして、これから先も、守り続けてくださるのであります。

この「教祖の親心にお応えす」るために、「よふぼく一人ひとりが教祖の道具衆としての自覚を高め」て、全教が同じ旬に、「手一つ」になって「仕切つて成人の歩みを進」ませていただくのが、教祖年祭への歩みであります。

ここに「教祖年祭を勤める意義」があるんですね。

三年千日の所以

さて、この年祭活動は、「三年千日」と仕切つて勤めるわけですが、なぜ、「三年千日と仕切る」のか、と。この意味については、「諭達」では、ひながたの道を通らねばひながた要らん。(略) ひながたの道より道が無いで。

(明治二十二年十一月七日)

した日であり、それはまた、「存命の理」として新たなたすけの世界へ扉を開かれた元一日でもあります。教祖が~~は~~、ひながたの道中、幾重難難苦勞の道を行んでくださったのは、可愛い子供たちをたすけたい、陽気ぐらしへ導いてやりたいという親心に他なりません。

教祖のひながたの30年には、この親心が一貫して流れて~~いますね~~。そして、ひながたの道は、定命を縮めてまで子供の成人をお促しくださった親心で締め括られています。

さらには、この親心は、存命の教祖の親心として、今も、~~私たちをお守りくださっています~~。そして、これから先も、~~私たちが守り続けてくださるのであります~~。

この「教祖の親心にお応えす」るために、「よふぼく一人ひとりが教祖の道具衆としての自覚を高め」て、全教が同じ旬に、「手一つ」になって「仕切つて成人の歩みを進める」~~「ませていただく」ことが~~、教祖年祭への歩みであり、~~「は」~~。

~~「は」~~「教祖年祭を勤める意義」~~が~~ありますね。

三年千日の所以

さて、~~「の」~~年祭活動は~~「三年千日」と仕切つて勤めるわけですが~~、~~なぜ~~、「三年千日と仕切る」~~のか~~、と。この意味については、「諭達」に引用された~~「は」~~、ひながたの道を通らねばひながた要らん。(略) ひながたの道より道が無いで。

(明治二十二年十一月七日)

した日であり、それはまた、「存命の理」として新たなたすけの世界へ扉を開かれた元一日でもあります。教祖が、ひながたの道中、幾重難難苦勞の道を行んでくださったのは、可愛い子供たちをたすけたい、陽気ぐらしへ導いてやりたいという親心に他なりません。

教祖のひながたの30年には、この親心が一貫して流れて~~います~~。そして、ひながたの道は、定命を縮めてまで子供の成人をお促しくださった親心で締め括られています。

さらには、この親心は、存命の教祖の親心として、今も、これから先も、私たちを守り続けてくださるので~~す~~。

この「教祖の親心にお応えす」るために、「よふぼく一人ひとりが教祖の道具衆としての自覚を高め」て、全教が同じ旬に、「手一つ」になって「仕切つて成人の歩みを進める」ことが、教祖年祭への歩みであり、「教祖年祭を勤める意義」です。

三年千日の所以

さて、年祭活動は「三年千日」と仕切つて勤めますが、「三年千日と仕切る」意味については、「諭達」に引用された、ひながたの道を通らねばひながた要らん。(略) ひながたの道より道が無いで。

(明治二十二年十一月七日)

このおさしづを引いて教えていただいています。

この中略の部分には、

五十年の間の道を、まあ五十年三十年も通れと言えはいこまい。二十年も十年も通れと言うのやない。まあ十年の中の三つや。三日の間の道を通ればよいのや。僅か千日の道を通れと言うのや。千日の道が難しのや。ひながたの道より道が無いで。

(明治二十二年十一月七日)

と、つまり、「三年千日と仕切る」というのは、「しっかりと教祖のひながたの道を三年と仕切ってしっかりと通ってくれ」、このように親神様は仰るんですね。

「年祭活動」という文字を見れば、「活動」とありま
すから、何か実動することに目がいきます。もちろん
一手一つになって活発に勇んだ活動することは、「年
祭活動」には欠かせないことですが、その「活
動」の根底にあるもの、ベースとなるのは、「ひなが
たの実践」なんです。

二年の中の僅か3年、この道を通らせていただくん
です。ひながたを目標に、教祖から教えられた教えを
実践することでありませう。

この句に通るべきひながたとは

じゃあ、この句に、私たちが通るべきひながたはど
んな通り方でしょうか。それも「論達」に述べてくださ
っています。「論達」に、

教祖はひながたの道を、まず貧に落ちきるところから

というおさしづを引いて教えられていただい
ます。

この中「略」の部分には、

五十年の間の道を、まあ五十年三十年も通れと言えはいこまい。二十年も十年も通れと言うのやない。まあ十年の中の三つや。三日の間の道を通ればよいのや。僅か千日の道を通れと言うのや。千日の道が難しのや。ひながたの道より道が無いで。

(明治二十二年十一月七日)

と、つまり、「三年千日と仕切る」というのは、「しっかりと教祖のひながたの道を三年と仕切ってしっかりと通ってくれ」ということ、このように親神様は仰るんですね。

「年祭活動」という文字を見れば、「活動」とありま
すから、何か実動することに目がいきます。もちろん
一手一つになって活発に勇んだ活動することは、「年
祭活動」には欠かせないことですが、その「活
動」の根底にあるもの、ベースとなるのは、「ひ
ながたの実践」なんです。

二年の中の僅か3年、この道を通らせていただくん
です。ひながたを目標に、教祖から教えられた教えを
実践することでありませう。

この句に通るべきひながたとは

じゃあ、この句に、私たちが通るべきひながたはど
んな通り方でしょうか。それも「論達」に述べてくださ
っています。「論達」に、

教祖はひながたの道を、まず貧に落ちきるところから

というおさしづで教えられます。

この「略」の部分には、

五十年の間の道を、まあ五十年三十年も通れと言えはいこまい。二十年も十年も通れと言うのやない。まあ十年の中の三つや。三日の間の道を通ればよいのや。僅か千日の道を通れと言うのや。千日の道が難しのや。ひながたの道より道が無いで。

(明治二十二年十一月七日)

と、つまり、「教祖のひながたの道を三年と仕切ってしっかりと通ってくれ」ということです。

「年祭活動」という文字を見れば、「活動」とありま
すから、何か実動することに目がいきます。もちろん
一手一つになって活発に勇んだ活動することは、「年
祭活動」には欠かせないことですが、その「活
動」の根底にあるもの、ベースとなるのは、「ひなが
たの実践」なんです。

二年の中の僅か3年、ひながたを目標に、教祖から教
えられた教えを実践することです。

この句に通るべきひながたとは

では、この句に、私たちが通るべきひながたはど
んな通り方でしょうか。それも「論達」に、

教祖はひながたの道を、まず貧に落ちきるところから

始められ、どのような困難な道中も、親神様のお心のままに、心明るくお通り下された。
あるときは、

「水を飲めば水の味がする」
と、どんな中でも親神様の大きいなるご守護に感謝して通ることを教えられ、また、あるときは、

「ふしから芽が出る」
と、成ってくる姿はすべて人々を成人へとお導き下さる親神様のお計らいであると諭され、周囲の人々を励まされた。

さらには、

「人救けたら我が身救かる」

と、ひたすらたすけ一条に歩む中に、いつしか心は澄み、明るく陽気に救われていくとお教え下された。ちびを慕い親神様の思召に添いきる中に、必ず成程という日をお見せ頂ける。この五十年にわたるひながたこそ、陽気ぐらしへと進むただ一条の道である。

これは、この旬に通らせていただくひながたの道の大要を述べてくださっています。

ここに、「水を飲めば水の味がする」・「ふしから芽が出る」・「人救けたら我が身救かる」という3つのお言葉が出てまいります。この3つのお言葉について思うところをお話ししたいと思います。

「水を飲めば水の味がする」

まず「水を飲めば水の味がする」についてであります。私たちは、親神様の尽きることなく絶えることのない

始められ、どのような困難な道中も、親神様のお心のままに、心明るくお通り下された。
あるときは、

「水を飲めば水の味がする」
と、どんな中でも親神様の大きいなるご守護に感謝して通ることを教えられ、また、あるときは、

「ふしから芽が出る」
と、成ってくる姿はすべて人々を成人へとお導き下さる親神様のお計らいであると諭され、周囲の人々を励まされた。

さらには、

「人救けたら我が身救かる」

と、ひたすらたすけ一条に歩む中に、いつしか心は澄み、明るく陽気に救われていくとお教え下された。ちびを慕い親神様の思召に添いきる中に、必ず成程という日をお見せ頂ける。この五十年にわたるひながたこそ、陽気ぐらしへと進むただ一条の道である。

と、これは、この旬に通るべきひながたの道の大要が述べられてくださっています。

ここに、「水を飲めば水の味がする」・「ふしから芽が出る」・「人救けたら我が身救かる」という3つのお言葉が出てまいります。これらのお言葉について思うところをお話ししたいと思います。

「水を飲めば水の味がする」

まず「水を飲めば水の味がする」についてであります。私たちは、親神様の尽きることなく絶えることのない

始められ、どのような困難な道中も、親神様のお心のままに、心明るくお通り下された。
あるときは、

「水を飲めば水の味がする」
と、どんな中でも親神様の大きいなるご守護に感謝して通ることを教えられ、また、あるときは、

「ふしから芽が出る」
と、成ってくる姿はすべて人々を成人へとお導き下さる親神様のお計らいであると諭され、周囲の人々を励まされた。

さらには、

「人救けたら我が身救かる」

と、ひたすらたすけ一条に歩む中に、いつしか心は澄み、明るく陽気に救われていくとお教え下された。ちびを慕い親神様の思召に添いきる中に、必ず成程という日をお見せ頂ける。この五十年にわたるひながたこそ、陽気ぐらしへと進むただ一条の道である。

と、この旬に通るべきひながたの道の大要が述べられています。

ここに、「水を飲めば水の味がする」・「ふしから芽が出る」・「人救けたら我が身救かる」という3つのお言葉が出てきます。これらについて思うところをお話しします。

「水を飲めば水の味がする」

私たちは、親神様の尽きることなく絶えることのないご守護にお守りいただいて日々通り、教祖の親心にお

ご守護にお守りいただいて、日々通らせていただいています。そして教祖の親心にお導きをいただいて陽気ぐらしへの道を歩んでるわけです。この「親神様のご守護がありがたい」・「教祖の親心がもったいない」と、「ご守護」を「ご守護」と感じ、「親心」を「親心」と感じて、感謝をするところから信仰は始まると思えます。

そして、この「ご守護」と「親心」を「ご恩」と感じるようになって、信仰は深まっていくんです。この「ご守護」と「親心」に、日々感謝をすることが、信仰の基本であるように思います。

ここで、以前お話ししたかもしれませんが、私がいただいた身上について少しお聴きいただきたいと思えます。私は今の33歳ですが、お歳のときに厄介なお手入れをいただきました。その身上の症状はきつい目眩ですね、強烈な目眩でした。これが高じてとうとう歩けなくなり、立つことすらできなくなって、寝たきりの状態になったんです。このときは、尿瓶で用を足しておりました。お使いになった方もいらつしやると思えます。あれって布団の中で用を足しやあ済むんです。後は家内が捨てに行ってくれますね。でもこれが便利やなんて言うてられません。まだお歳、現職の教会長である、家族もいる、子供は小さい、このままの状態がいつまで続くのだろうかと、実に不安な日を過ごしました。

ところがある日の朝、まだ暗い時間にトイレに行きたくなって目が覚めたんです。まだ起き抜けで頭が

ご守護にお守りいただいて、日々通り、お導きを受けています。そして教祖の親心にお導きをいただいて陽気ぐらしへの道を歩んでるわけですね。この「親神様のご守護がありがたい」・「教祖の親心がもったいない」と、「ご守護」を「ご守護」と感じ、「親心」を「親心」と感じて、感謝をするところから信仰は始まると思えます。

そして、この「ご守護」と「親心」を「ご恩」と感じるようになって、信仰は深まっていくんです。この「ご守護」と「親心」に、日々感謝をすることが、信仰の基本であるように思います。

ここで、以前お話ししたかもしれませんが、私がいただいた身上について少しお聴きいただきたいと思えます。私は今の33歳ですが、お歳のときに、厄介なお手入れをいただきました。その身上の症状はきつい目眩ですね、強烈な目眩でした。これが高じてとうとう歩けなくなり、立つことすらできなくなって、寝たきりの状態になりました。尿瓶で用を足し、お使用になった方もいらつしやると思えます。あれって布団の中で用を足しやあ済むんです。後は家内が捨てに行ってくれますが、ね。でもこれが便利やなんてとは言っておられません。まだお歳、現職の教会長である、家族もいる、子供は小さい、このままの状態がいつまで続くのだろうかと、実に不安な日を過ごしました。

ところがある日の朝、まだ暗い時間にトイレに行きたくなって目が覚め、まだ起き抜けで頭が

導きいただいて陽気ぐらしへの道を歩んでいます。この「親神様のご守護がありがたい」・「教祖の親心がもったいない」と、「ご守護」を「ご守護」と感じ、「親心」を「親心」と感じて、感謝をするところから信仰は始まると思えます。

そして、この「ご守護」と「親心」を「ご恩」と感じるようになって、信仰は深まっていくんです。この「ご守護」と「親心」に、日々感謝をすることが、信仰の基本であるように思います。

私(33歳)はお歳のときに、厄介な身上お手入れをいただきました。強烈な目眩が高じてとうとう歩けなくなり、立つことすらできなくなって、寝たきりの状態になりました。布団の中で尿瓶で用を足し、後は家内が捨てに行ってくれますが、これが便利とは言っておられません。まだお歳、現職の教会長、家族もいる、子供は小さい、このままの状態がいつまで続くのだろうかと、実に不安な日を過ごしました。

ところがある日の朝、トイレに行きたくなって目が覚め、ぼーっとしていたせいか、電気を点けようと思っ

ぼーっとして、昨日まで立てなかったということが意識できてなかったんでしょう。電気を点けようと思っただけです。そのとき「立てた！」と思いましたが、何日かぶりです。立つことができた。これは感激でありますね、もう感動でした。そして次の日、一歩、そのまた次の日、一歩二歩と歩けるようになった。毎日が感動の連続でした。「普通に立てること、普通に歩けること、これがどれほどありがたかったのか」ということを、あのとき、身上になって気付かせていただきました。まさに「水を飲めば水の味がする」というお言葉を、身に染みて実感する瞬間であります。

この身上は、一時は良くなりましたが、すぐにご守護いただいたわけでもありません。良くなったり悪くなったりを繰り返して、結局、全快するまで7年という歳月を要したんです。良くなったり悪くなったりしながら7年掛けて身上のご守護いただいたんです。この間ですね、私は、最初、親神様に何をお願いしていたのか。「たすけてほしい」「なんとかご守護いただきたい」、毎日、そればかりでありました。しかし、あるときふと、ふと考えたんです。私は「なぜご守護をいただきたいのか」「ご守護をいただいて何をやりたいのか」と、これを考えたんです。私はよふぼくです、現職の教会長である。「そうやて、会長として御用を勤めることやて、よふぼくとして御用を勤めるために、ご守護をいただくんじゃないか」と。これが分かったときには、もう「直してください」とか「ご守護ください」というお願いは一切しなくなりました。「教会

ぼーっとしていたせい、昨日まで立てなかったという意識できてなかったんです。電気を点けようと思っただけです。そのとき「立てた！」と思いましたが、何日かぶりにはありません。立つことができた。これは感激でありますね、もう感動でした。そして次の日、一歩、そのまた次の日、一歩二歩と歩けるようになった。毎日が感動の連続でした。「普通に立てること、普通に歩けること、これがどれほどありがたかったのか」ということを、あのとき、身上になって気付かせていただきました。まさに「水を飲めば水の味がする」というお言葉を、身に染みて実感した瞬間であります。

この身上は、一時は良くなりましたが、すぐにご守護いただいたわけでもありません。良くなったり悪くなったりを繰り返して、結局、全快するまで7年という歳月を要したんです。良くなったり悪くなったりしながら7年掛けて身上のご守護いただいたんです。この間ですね、私は、最初のうちは、①親神様に何をお願いしていましたか。②「たすけてほしい」「なんとかご守護いただきたい」、毎日、そればかりを求めています。③しかし、あるときふと、ふと考えたんです。私は「なぜご守護をいただきたいのか」「ご守護をいただいて何をやりたいのか」と、これを考えました。私はよふぼくです、現職の教会長です。「そうやて、会長として御用を勤めることやて、よふぼくとして御用を勤めるために、ご守護をいただくんじゃないか」と。これが分かったときには、もう「直してください」とか「ご守護ください」と

て立ち上がったのです。そのとき「立てた！」と思いましたが、何日かぶりに立つことができた。これは感激です、もう感動でした。そして次の日、一歩、そのまた次の日、一歩二歩と歩けるようになった。毎日が感動の連続でした。「普通に立てること、普通に歩けること、これがどれほどありがたかったのか」ということを、身上になって気付いた。まさに「水を飲めば水の味がする」というお言葉を、身に染みて実感した瞬間でした。

この身上は、良くなったり悪くなったりを繰り返して、全快まで7年掛かりました。この間、最初のうちは、「たすけてほしい」「なんとかご守護いただきたい」「たすけてほしい」「なんとかご守護いただきたい」と、これを親神様にお願いしていました。しかし、あるとき、ふと「なぜご守護をいただきたいのか」「ご守護をいただいて何をやりたいのか」と考えました。私はよふぼく、現職の教会長です。「そうだ、会長として御用を勤めること、よふぼくとして御用を勤めるために、ご守護をいただくんじゃないか」と分かったとき、もう「直してください」「ご守護ください」というお願いは一切しなくなり、「教会長として御用を勤めさせていただきたい」「よふぼくとしてお使い頂きたい」、こればかりをお願いして、そして調子が良くなれば、とにかく動いて、自分のできることをしてきようと思えます。そうして、自分の身上と立場の御用に向き合いながら、そのときどきに何ができるかを

に掛かるときの、私の大きな力になっています。そういう意味で、私にとって、この7年は決して無駄ではなく、却ってこの7年があつて良かったと思えるようになったんです。私もこの身上で少しは成人できたかなと感じてる所でもあります。誰しも、身上になれば辛く苦しいものであります。これは自分のことだけではなく、大切な人が病気で苦しんでる姿は見ているだけでも辛いんです。

この「病氣」とはどんな姿であるかと考えれば、「それまで当たり前のように使っていた体のある部分や、機能することが当たり前であると、このように思っていた臓器が、当たり前でなくなった姿」ですね。

ということとは、逆に言えば、「病氣が治る」ということは、「当たり前でなくなったところが当たり前に戻っただけの姿」です。

病氣が治ったら、誰でも喜びます。身上が難しければ難しいときほど、ご守護をいただいたときの喜びは、天にも昇るようなものであります。病氣が治ってうれしい、ご守護いただいてありがたいと思います。

これは何を喜んでいるのかといえ、**「当たり前である」ということ、これを喜んでるんですね。「当たり前である」とこと、「普通である」ということ、「悉なき日々」、これが親神様から頂戴している「最もうれしくありがたいご守護」であります。これを喜ばずして何を喜ぶのか、これに感謝せずして何に感謝をするのでしょうか。**

けに掛かるときの、私の大きな力になっています。~~その~~いう意味で、私にとって、この7年は決して無駄ではなく、却ってこの7年があつて良かったと思えるようになったんです。私もこの身上で少しは成人できたかなと感じてる所でもあります。誰しも、身上になれば辛く苦しいものであります。~~それは自分のことだけではなく、大切な人が病気で苦しんでいる姿は見ているだけでも辛いんです。~~

~~この「病氣」とはどんな姿であるかと考えれば、「それまで当たり前のように使っていた体のある部分や、機能することが当たり前であると、このように思っていた臓器が、当たり前でなくなった姿」ですね。~~

~~ということとは、逆に言えば、「病氣が治る」ということは、「当たり前でなくなったところが当たり前に戻っただけの姿」です。~~

~~病氣が治れば、誰でも喜びます。身上が難しければ難しいときほど、ご守護をいただいたときの喜びは、天にも昇るようなものであります。病氣が治ってうれしい、ご守護いただいてありがたいと思います。~~

~~これは何を喜んでいるのかといえ、**「当たり前である」ということ、これを喜んでるんですね。「当たり前である」とこと、「普通である」ということ、「悉なき日々」、これが親神様から頂戴している「最もうれしくありがたいご守護」であります。これを喜ばずして何を喜ぶのか、これに感謝せずして何に感謝をするのでしょうか。**~~

の、私の大きな力になっています。誰しも、身上になれば辛く苦しいものです。自分だけでなく、大切な人が病気で苦しんでいる姿は見ているだけでも辛いんです。

「病氣」とはどんな姿かと考えると、「それまで当たり前のように使っていた部位や、機能するのが当たり前と思っていた臓器が、当たり前でなくなった姿」です。

逆に言えば、「病氣が治る」ということは、「当たり前でなくなったところが当たり前に戻っただけの姿」です。

病氣が治れば、誰でも喜びます。身上が難しければ難しいほど、ご守護をいただいたときは、天にも昇るように喜びます。病氣が治ってうれしい、ご守護いただいてありがたいと思います。

これは何を喜んでいるのかといえ、**「当たり前である」ということ、これを喜んでるんです。「当たり前である」とこと、「普通である」とこと、「悉なき日々」、これが親神様から頂戴している「最もうれしくありがたいご守護」です。これを喜ばずして何を喜ぶのか、これに感謝せずして何に感謝をするのでしょうか。**

また、たとえ今身上をいただいていたとしても、よくよく思案をすれば、その他のところでは、それ以外のところでは、山ほどのご守護をいただいていることに気付きます。——身上をいただいているところはほとんどいけれど、それ以外のところは使わせていただける。——これもご守護であります。

こうして毎日を過ごせる、自然環境が整っている、周囲を見渡せば家族がいる、大切な人がいる、私を支えてくれる人がいる、同じ信仰をする仲間がいる、仕事もできる、そして何よりも今、生かさせていただいている——これらすべては、親神様のご守護であります。感謝をし、喜ばせていただくことは、探せばいくらでもあるのであります。

親神様のご守護、教祖の親心を思えば思うほど、感謝の心しか湧いてこないのです。——「報恩感謝の日々を通していただくこと」が、「お道の信仰の基本的な態度」でありましょう。——これを、教祖は「水を飲めば水の味がする」という言葉をもって教えてください。——思えてなりません。

「ふしから芽が出る」

続いて、「ふしから芽が出る」との教えであります。

以前、前真柱様から「教祖がひながたの道中で一番ご苦心されご苦労くださったことは何か。貧の道を進まされて、経済的に困窮されたことではないんだ。一番のご苦労ご苦心は、教祖のことを理解してくれる人が

のでしょう。

また、たとえ今身上がよい状態であつたとしても、よくよく思案をすれば、その他のところでは、それ以外のところでは、山ほどのご守護をいただいていることに気付きます。——身上がよい状態であるところはほとんどいけれど、それ以外のところは使わせていただける。——これもご守護であります。

こうして毎日を過ごせる、自然環境が整っている、周囲を見渡せば家族がいる、大切な人がいる、私を支えてくれる人がいる、同じ信仰をする仲間がいる、仕事もできる、そして何よりも今、生かさせていただいている——これらすべては、親神様のご守護で、ありがとうございます。感謝をし、喜ばせていただくことは、探せばいくらでもあるのであります。

親神様のご守護、教祖の親心を思えば思うほど、感謝の心しか湧いてこないのです。——「報恩感謝の日々を通していただくこと」が、「お道の信仰の基本的な態度」でありましょう。——これを、教祖は「水を飲めば水の味がする」という言葉で教えてください。——思えてなりません。

「ふしから芽が出る」

続いて、「ふしから芽が出る」との教えであります。

以前、前真柱様から「教祖が③ひながたの道中で一番のご苦心されご苦労くださったことは、何か。貧の道を進まれて、経済的に困窮されたことではないんだ。一番のご苦労ご苦心は、教祖のことを理解する人が

また、たとえ身上があつたとしても、よくよく思案すれば、そこ以外では、山ほどのご守護をいただいていることに気付きます。——身上があるところはほとんどいけれど、そこ以外では使える。——これもご守護です。

こうして毎日を過ごせる、自然環境が整っている、周囲を見渡せば家族がいる、大切な人がいる、支えられる人がいる、同じ信仰をする仲間がいる、仕事もできる、そして何よりも今、生かされている——これらすべては、親神様のご守護で、感謝し、喜ぶことは、探せばいくらでもあるのです。

親神様のご守護、教祖の親心を思えば思うほど、感謝の心しか湧いてこない。——「報恩感謝の日々を通していただくこと」が、「お道の信仰の基本的な態度」。——これを、教祖は「水を飲めば水の味がする」という言葉で教えられたと思えてなりません。

「ふしから芽が出る」

以前、前真柱様から聴かせていただいたことですが、教祖は、貧の道・どん底へ自ら進んで歩まれたので、ひながたの道中で一番のご苦労は、経済的な困窮ではない。教祖のことを理解する人がいない、聴き分け

の土佐家から井筒家へ養子に入りました。実は、終戦後ロシア軍の捕虜となつて極寒の地シベリアで二年間という長期間、抑留生活を送つて、昭和二年、終戦二年後です、帰国をしたんですが、その翌年に養子に入つて、その次の年にもう大教会長に就任したんです。ですからシベリアから帰国してわずか1年4ヶ月で大教会長になりました。

それまでに芦津が厳しい状況にあることは耳にしていたようですが、会長になつてあらためて事情の大きさに気付くんです。時間の関係で詳しくは話せませんが、芦津のとんでもない事情を、実は二代真柱様が大きな親心で抱き抱えてくださっていたことを知ったのであります。父は、「このままでは申し訳ない」・芦津は理が立たない・「教祖のひながたを辿らせてもらおう」・「初代の道に立ち返ろう」と、こう考えた父は、教会の土地建物をすべて売却して、本部にお供えすることを決心したんです。これを役員たちに相談したところ「会長さん、よくぞその決心をしてくださいました」と涙を流して賛同してくれました。そして、二代真柱様にこれを申し上げると「分かった。やってみよ」と道のをやが背中を押してくださいました。そこで、すべてを本部にお返しして、大教会は同じ大阪市内にある部内教会に仮移転をすることになりました。その部内教会の神殿に大教会の神様をお鎮まりいただき、そしてその教会の神様は空き地にプレハブを建ててそつちにお遷りいただいたんですね。ですから門には芦津大教会とその分教会の名前が名称、二つ看板掛かっています。毎日、朝夕のおつとめも2回ですね、

会の土佐家から井筒家へ養子に入りました。実は、①終戦後ロシア軍の捕虜となつて極寒の地シベリアで二年間という長期間、抑留生活を送りつて、昭和二年、(終戦二年後)です、帰国をしたんですが、その翌年に養子に入つて、③その次の年、にもう大教会長に就任したんです。ですからシベリアから帰国してわずか1年4ヶ月で大教会長になりました。

それまでに芦津が厳しい状況にあることは耳にしていたようですが、会長になつてあらためて事情の大きさに気付くんです。時間の関係で詳しくは話せませんが、芦津のとんでもない事情を、実は二代真柱様が大きな親心で抱き抱えてくださっていたことを知ったのであります。父は、「このままでは申し訳ない」・芦津は理が立たない・「教祖のひながたを辿らせてもらおう」・「初代の道に立ち返ろう」と、~~よく~~考えた父は、教会の土地建物をすべて売却して、本部にお供えすることを決心、~~したんです~~。これを役員~~たち~~に相談する~~ると~~、~~た~~と~~も~~「会長さん、よくぞその決心をしてくださいました」と涙を流して賛同してくれました。そして、二代真柱様に~~これを~~申し上げると「分かった。やってみよ」と道のをやが背中を押してくださいました。そこで、すべてを本部にお返しして、~~大~~教会は同じ大阪市内にある部内教会に仮移転を~~する~~ことになりました。その部内教会の神殿に大教会の神様をお鎮まりいただき、そしてその教会の神様は空き地にプレハブを建ててそつちにお遷りいただいたんですね。ですから門には芦津大教会とその分教会の名前が名称、~~二~~つ看板掛かっています。毎日、朝夕のおつとめも

に撫養大教会の土佐家から井筒家へ養子に入りました。その次の年、シベリアから帰国してわずか1年4ヶ月で大教会長になりました。

会長になつて、芦津のとんでもない事情を、実は二代真柱様が大きな親心で抱き抱えてくださっていたことを知った父は、「このままでは申し訳ない」・芦津は理が立たない・「教祖のひながたを辿らせてもらおう」・「初代の道に立ち返ろう」と考え、教会の土地建物をすべて売却して、本部にお供えすることを決心、役員に相談すると賛同してくれ、二代真柱様に申し上げると「やってみよ」と道のをやが背中を押してくださいました。そこで、すべてを本部にお返しして、大阪市内にある部内教会に大教会の神様をお鎮まりいただきました。

月次祭も月に2回勤めるわけですね。大教会といえども事情は起こるときには起こります。戦後の混乱期を除けば、部内教会に間借りをした大教会は芦津ぐらいのものであります。こうした状況から本部は？再スタートしたんです。この事情に対する本部のお仕込みは実に厳しいものであります。

このときの世話人先生が、大教会長さんの奥さんの曾おじいさんです、(中山)爲信先生な、この方が毎月のように大教会に来られました。そして、その毎月の月次祭当日運んでくださった部内教会の御供はもちろん、賽銭箱をひっくり返してそれを全て風呂敷包みに包んで本部まで持って帰られました。当時、世話人先生はこう仰った。「これから芦津は毎月集まった全ての御供を、おちばへ運ぶように」というお仕込みであります。そうしますと大教会には1円も残らない、残さない。月末の電気代やガス代など支払いができなくなり。そこで「必要な経費があれば後で本部に貰いにくるよう」という、こういうお仕込みでありました。実に厳しいお仕込みでしたが、このお仕込みがあつたから今の芦津があると思います。こうした中の再スタートでしたから、もちろん贅沢など一切できません。とにかく質素を旨とした教会生活が始まりました。当時は教会の者がハッピを着て市場へ行き、落ちてる野菜を拾ったり、売れ残りの野菜をもらってくるのが朝の日課になっていました。それを毎日の食事のおかずにしてたんです。ある日、青年が市場の中の八百屋さん、いつも残った野菜をくれる八百屋さんに行つたときに、その大将から「あんたのこは、いつ

申ですね、月次祭も月に2回勤めるわけですね。大教会といえども事情は起こるときには起こります。戦後の混乱期を除けば、部内教会に間借りをした大教会は芦津ぐらいのものであります。こうした状況から本部は？再スタートしたんです。この事情に対する本部のお仕込みは実に厳しいものであります。

このときの世話人先生が、大教会長さんの奥さんの曾おじいさんです、(中山)爲信先生な、この方が毎月のように大教会に来られました。そして、その毎月の月次祭当日運んでくださった部内教会の御供はもちろん、賽銭箱をひっくり返してそれを全て風呂敷包みに包んで本部まで持って帰られました。当時、世話人先生はこう仰った。「これから芦津は毎月集まった全ての御供を、おちばへ運ぶように」というお仕込みであります。そうしますと大教会には1円も残らない、残さない。月末の電気代やガス代など支払いができなくなり。そこで「必要な経費があれば後で本部に貰いにくるよう」という、こういうお仕込みでありました。実に厳しいお仕込みでしたが、このお仕込みがあつたから今の芦津があると思います。こうした中の再スタートでしたから、もちろん贅沢など一切できません。とにかく質素を旨とした教会生活が始まりました。当時は教会の者がハッピを着て市場へ行き、落ちてる野菜を拾ったり、売れ残りの野菜をもらってくるのが朝の日課になっていました。それを毎日の食事のおかずにしていました。ある日、青年が市場の中の八百屋さん、いつも残った野菜をくれる八百屋さんに行つたときに、その大将から「あんたのこは

このときの世話人先生は「これから芦津は毎月集まった全ての御供を、おちばへ運ぶように。必要な経費があれば後で本部に貰いにくるよう」という実に厳しいお仕込みでした。こうした中の再スタートでしたから、贅沢など一切できません。とにかく質素を旨とした教会生活が始まりました。教会の者が市場へ行き、落ちてる野菜を拾ったり、売れ残りの野菜をもらってくる、それを毎日の食事のおかずにしていました。

つも、残った野菜をもらいに来るけど、天理さんはたくさん鶏を飼ってんねんな」とこう言われました。その青年も「はい、教会にはたくさん鶏がいるんです。せやから、ぎょうさんください」と返事をしてト口箱いっぱい野菜を貰うて帰ってきた。笑い話のような逸話も残っています。鶏並やっただんでね、そつからスタートであります。私もそうした中で育ったんですが、母や教会の人に手を引かれて野菜を拾いに行つたことがよくありました。でも幼なかつた私の記憶にかすかに残っているのは、楽しかつたという思い出だけなんです、楽しかつた。これが思春期の頃なら、もしかしたら多少、性格がひねくれていたかもしれないね。苦勞を苦勞と思わない頃に、親とともに苦勞の道を歩ませていただけたのは私にとって大変ありがたいことだつたと思います。あの事情の最中はこうした日々でありました。

このふいは芦津にとつて大きな、もう実になきなふしでありました。父や当時の芦津の人たちは、あのふしの中をどうして通ることができたのか。それは、教祖のひながたの道があつたからであります。「教祖は理解をしてくれるものが誰もいないな、笑われ謗られる道をお通りくださった。それを思えばわしらはありがたいやないか」と。「道を歩けば挨拶をしてくれる人もいる」と。「市場へ行つたら野菜を分けてくれる店もある」と。「私たちの周りには理解をしてくれ支えてくれる人はなんぼでもある。教祖のことを思えば、結構やありがたい。まだまだ通れる」と思つてあの苦勞の中を通つてくれたんです。

これは、いつつも、残った野菜をもらいに来るけど、天理さんはたくさん鶏を飼ってんねんな」とこう言われました。その青年も「はい、教会にはたくさん鶏がいあんです。せやから、ぎょうさんください」と返事をしてト口箱いっぱい野菜を貰うて帰ってきた。笑い話のような逸話も残っています。鶏並やっただんでね、そつからのスタートであります。私もそうした中で育つたんですが、母や教会の人に手を引かれて野菜を拾いに行つたことがよくありました。でも幼なかつた私の記憶にかすかに残っているのは、楽しかつたという思い出だけなんです、楽しかつた。これが思春期の頃なら、もしかしたら多少、性格がひねくれていたかもしれないね。苦勞を苦勞と思わない頃に、親とともに苦勞の道を歩ませていただけたのは私にとつて大変ありがたいことだつたと思います。あの事情の最中はこうした日々でありました。

このふいは芦津にとつて大きな、もう実になきなふしでありました。父や当時の芦津の人たちは、あのふしの中をどうして通ることができたのか。それは、教祖のひながたの道があつたからであります。「教祖は理解をしてくれるものが誰もいないな、笑われ謗られる道をお通りくださった。それを思えばわしらはありがたいやないか」と。「道を歩けば挨拶をしてくれる人もいる」と。「市場へ行つたら野菜を分けてくれる店もある」と。「私たちの周りには理解をしてくれ支えてくれる人はなんぼでもある。教祖のことを思えば、結構やありがたい。まだまだ通れる」と思つてあの苦勞の中を通つてくれたんです。

このふいは芦津にとつて実になきなふしでしたが、父や当時の芦津の人たちは、その中をどうして通ることができたのか。それは、教祖のひながたの道があつたからです。「教祖は理解をしてくれるものが誰もいないな、笑われ謗られる道をお通りくださった。それを思えばわしらはありがたい。道を歩けば挨拶をしてくれる人もいる。市場へ行つたら野菜を分けてくれる店もある。私たちの周りには理解をしてくれ支えてくれる人はなんぼでもある。教祖のことを思えば、結構やありがたい。まだまだ通れる。教祖はご存命や。一生懸命に通つていれればご存命の教祖が必ず導いてくださる、良いようにしてくださる、間違いない」と「

そして、「教祖はご存命や」って、「一生懸命に通って
いればご存命の教祖が必ず導いてくださる、良いよう
にしてください、間違いない」と「ご存命の理」に凭
れて通ってくれたんです。ですからあのふしの中を安
心して通り抜けることができました。

こうした大節の中を教祖のひながたを支えに、「ご存
命の理」を頼りに通る中に、数々のご守護が上がって
きました。人が寄り、心が寄り、物が寄り、真実が寄っ
て、5年後には、現在の場所に、小さな教会でしたが、
小さな神殿でしたが、教会復興のご守護をいただいた
のであります。

今の芦津があるのは、あの大きなふしがあればこそで
あります。——あの苦労の中をいつも教祖が支えてく
ださったのであります。教祖が「ご存命の理」でお導
きくださったのであります。そのおかげで、あのふし
を乗り越えることができました。こうして「ふしか
ら芽が出る」ご守護をいただけたのであります。

現在、皆さんの中には「私は苦労の道を通っているん
だ」「大変な道を通っているんだ」と思っている方が
いらつしやったとしても、それを理解してくれる人は
必ずありますね。皆さんの周りを見てください。教会
に繋がるよふぼくや信者さんがおられるじゃないです
か。理の親はいつも温かい心で見守ってくれるし、大
教会へ参れば心を打ち解けあえる教友もいます。おち
ばへ帰れば親心で迎えてくださる。私たちの周りには、
理解をして支えてくれる人はなんぼでもあります。

~~そして、「教祖はご存命や」って、「一生懸命に通っ~~
~~ていればご存命の教祖が必ず導いてくださる、良いよ~~
~~うにしてください、間違いない」と「ご存命の理」に~~
~~凭れて通ってくれたんです。ですからあのふしの中を~~
~~安心して通り抜けることができました。~~

~~こうした大節の中を教祖のひながたを支えに、「ご存~~
~~命の理」を頼りに通る中に、数々のご守護が上がって~~
~~きました。人が寄り、心が寄り、物が寄り、真実が寄っ~~
~~て、5年後には、現在の場所に、小さな教会でしたが、~~
~~小さな神殿でしたが、教会復興のご守護をいただきま~~
~~したいたのであります。~~

~~今の芦津があるのは、あの大きなふしがあればこそで~~
~~あります。——あの苦労の中をいつも教祖が支えてく~~
~~ださりやたのであります。教祖が「ご存命の理」で~~
~~お導きくださったのであります。そのおかげで、あの~~
~~ふしを乗り越えることができました。こうして、「ふ~~
~~しから芽が出る」ご守護をいただけたのであります。~~

~~現在、皆さんの中には「私は苦労の道を通っている~~
~~だ」「大変な道を通っているだ」と思っている方が~~
~~いらつしやったとしても、それを理解してくれる人は~~
~~必ずありますね。皆さんの周りを見てください。教会~~
~~に繋がるよふぼくや信者さんがおられる~~
~~ではないです。理の親はいつも温かい心で見守って~~
~~くれるし、大教会へ参れば心を打ち解けあえる教友も~~
~~います。おちばへ帰れば親心で迎えてくださる。私~~
~~たちの周りには、理解をして支えてくれる人は~~
~~なんぼ~~
~~あります。~~

存命の理」に凭れて通ったからあのふしの中を安心し
て通り抜けることができました。

こうした大節の中を教祖のひながたを支えに、「ご存
命の理」を頼りに通る中に、数々のご守護が上がって
きました。人が寄り、心が寄り、物が寄り、真実が寄っ
て、5年後には、現在の場所に、小さな神殿でしたが、
教会復興のご守護をいただきました。

今の芦津があるのは、あの大きなふしがあればこそで
す。——あの苦労の中をいつも教祖が支えてくださり、
教祖が「ご存命の理」でお導きくださったおかげで、
あのふしを乗り越えることができ、「ふしから芽が出
る」ご守護をいただけたのです。

現在、皆さんの中には「私は苦労の道を通っている」
「大変な道を通っている」と思っている方がいらつ
しやったとしても、それを理解してくれる人は必ずあ
りますね。皆さんの周りを見てください。教会に繋が
るよふぼくや信者さんがおられるではないですか。理
の親はいつも温かい心で見守ってくれるし、大教会へ
参れば心を打ち解けあえる教友もいます。おちばへ
帰れば親心で迎えてくださる。私たちの周りには、理
解をして支えてくれる人はいくらでもあります。

少々の苦労があっても、教祖を思えば、まだまだありがたい、まだまだ結構なんです。さらに、教祖がご存命で導いてくださっていることが、実にありがたく心強い限りです。

私は「どうか、教祖のお供をさせていただきとうござります」とお願いを申し上げて本部巡教に出向しております。つまり、今、私のそばに教祖はいてくださっているのです。

ですから安心をして今日の御用を勤めることができます。皆さんの側にも教祖は居てくださっています。ですから安心をしてお道の御用を勤めさせていただきます。

教祖は、「ご存命の理」をもってお働きくだされています。これほどありがたく心強いことはありません。皆さん方は、よふぼくの先達として、たすけ一条の道歩んでおられます。その道中は、決して楽しいことばかりではありません。教祖は「この者に成人させてやろう」と思われたら、親心のうえから、度々とふしをお見せくださいます。

現に、今、辛くて苦しい道歩んでおられる方もおありでしょう。人に言うに言えん、泣くに泣けんような道を通っておられる方もいらつしやるでしょう。心が折れそうになるときもあるんです。ぺっしやんに潰れてしまいうえになるときもあると思う。そんなときこそ、教祖のひながたを思い浮かべていただきたい。そして、教祖を思えば「まだまだ、わしらはありがたい」。「まだまだ結構や」と心を奮い起こして通っていただきたいんです。

少々の苦労があっても、教祖を思えば、まだまだありがたい、まだまだ結構な~~ん~~のです。さらに、教祖がご存命で導いてくださっていることが、実にありがたく心強い限りです。

私は「どうか、教祖のお供をさせていただきとうござります」とお願いを~~申し上げ~~て本部巡教に出向して~~お~~います。つまり、今、私のそばに教祖が~~はいて~~くださ~~って~~い~~る~~ので、~~あります~~。

~~ですから~~安心~~を~~して今日の御用を勤めることができます。~~ん~~のです。皆さんの側にも教祖は居~~ら~~れる~~せ~~く~~だ~~ま~~り~~ます。ですから安心~~を~~してお道の御用を勤め~~させ~~て~~いただ~~く~~こと~~が~~でき~~る~~ん~~です。

教祖は、「ご存命の理」をもってお働きくだされています。これほどありがたく心強いことはありません。皆さん方は、よふぼくの先達として、たすけ一条の道歩んでおられ~~ま~~る。その道中は、決して楽しいことばかりではありません。教祖は「この者に成人させてやろう」と思われたら、親心のうえから、度々とふしをお見せくださいます。

現に、今、辛くて苦しい道歩んでおられる方も~~お~~あり~~ま~~す。人に言うに言えん、泣くに泣けんような道を通っておられる方も~~い~~ら~~つ~~し~~や~~る~~べ~~し~~ょ~~う。心が折れそうになるときも~~あ~~る~~ん~~です。ぺっしやんに潰れてしまいうえになるときもあると思う。そんなときこそ、教祖のひながたを思い浮かべていただきたい。そして、教祖を思えば「まだまだ、わしらはありがたい」。「まだまだ結構や」と心を奮い起こして通~~っ~~て~~い~~た~~だ~~き~~たい~~んです。

少々の苦労があっても、教祖を思えば、まだまだありがたい、まだまだ結構なのです。さらに、教祖がご存命で導いてくださっていることが、実にありがたく心強い限りです。

私は「どうか、教祖のお供をさせていただきとうござります」とお願い申して本部巡教に出向しています。つまり、今、私のそばに教祖が居られるので、安心して今日の御用を勤めることができます。皆さんの側にも教祖は居られるから安心してお道の御用を勤めることができます。

教祖は、「ご存命の理」をもってお働きくだされています。これほどありがたく心強いことはありません。皆さん方は、よふぼくの先達として、たすけ一条の道歩んでおられる。その道中は、決して楽しいことばかりではありません。教祖は「この者に成人させてやろう」と思われたら、親心のうえから、度々とふしをお見せくださいます。

現に、今、辛くて苦しい道歩んでおられる方もありでしょう。人に言うに言えん、泣くに泣けんような道を通っておられる方もいます。心が折れそうになるときもあります。ぺしやんに潰れてしまいうえになるときもあると思う。そんなときこそ、教祖のひながたを思い浮かべていただきたい。そして、教祖を思えば「まだまだ、わしらはありがたい」。「まだまだ結構や」と心を奮い起こして通~~っ~~て~~い~~た~~だ~~き~~たい~~ので~~す~~。

そして、存命の教祖に、どこまでもお縋りして、お通りいただきたいのであります。教祖さえ見失わなければ、どんなふしでも芽が吹く道へとお導きくださるに違いありません。教祖のひながたの道を信仰の支えとして、どこまでもご存命の教祖のお供をさせていただいて、どうか、たすけ一条の道を進んでいただきたいと思ひます。

「人救けたら我が身救かる」

3つ目の「人救けたら我が身救かる」。ここから思案したいと思ひますが、教祖がひながたの道中で心を尽くされたのは、世界一れつをたすけることと、そのための人材を引き寄せて育てることであります。つまり、教祖がなされたのは、「人をたすける」と「人を育てる」ことです。今で言えば、「おたすけ」と「丹精」です。

ですから、教会活動のすべては、「人をたすける」と、「人を育てる」こと、すなわち「おたすけ」と「丹精」に繋がっているわけであります。

一人の人をよぶべくに「丹精」するためには、その道中、おたすけが欠かせません。このたすけが教会長・よぶべくの大切な御用であります。

親神様は、陽気ぐらしを目標に人間世界を作られた。ところで、陽気ぐらしというのは、簡素に言えばですよ、簡単に言えば、「親神様をや」と慕う私たち人間が、お互い、一れつ兄弟姉妹として、支え合い、補い合ひ、励まし合ひ、たすけ合う世界」であります。

ですから、親神様が、私たち人間に望まれていること

そして、存命の教祖に、どこまでもお縋りして、お通りいただきたいのであります。教祖さえ見失わなければ、どんなふしでも芽が吹く道へとお導きくださるに違いありません。教祖のひながたの道を信仰の支えとして、どこまでもご存命の教祖のお供をさせていただいて、どうか、たすけ一条の道を進んでいただきたいと思ひます。

「人救けたら我が身救かる」

3つ目の「人救けたら我が身救かる」。ここから思案したいと思ひますが、教祖がひながたの道中で心を尽くされたのは、世界一れつをたすけることと、そのための人材を引き寄せて育てることであります。つまり、教祖がなされたのは、「人をたすける」と「人を育てる」ことと、今で言えば、「おたすけ」と「丹精」です。

ですから、教会活動のすべては、「人をたすける」と、「人を育てる」こと、すなわち「おたすけ」と「丹精」に繋がっているわけであります。

一人の人をよぶべくに「丹精」するためには、その道中、おたすけが欠かせません。このたすけが教会長・よぶべくの大切な御用であります。

親神様は、陽気ぐらしを目標に人間世界を作られた。ところで、陽気ぐらしというのは、簡素に言えばですよ、簡単に言えば、「親神様をや」と慕う私たち人間が、お互い、一れつ兄弟姉妹として、支え合い、補い合ひ、励まし合ひ、たすけ合う世界」であります。

ですから、親神様が、私たち人間に望まれていること

そして、存命の教祖に、どこまでもお縋りして、お通りいただきたい。教祖さえ見失わなければ、どんなふしでも芽が吹く道へとお導きくださるに違いありません。教祖のひながたの道を信仰の支えとして、どこまでもご存命の教祖のお供をさせていただいて、どうか、たすけ一条の道を進んでいただきたいと思ひます。

「人救けたら我が身救かる」

教祖がひながたの道中で心を尽くされたのは、世界一れつをたすけることと、そのための人材を引き寄せて育てることです。

つまり、教祖がなされたのは、「人をたすける」と「人を育てる」こと、今で言えば、「おたすけ」と「丹精」です。ですから、教会活動のすべては、「人をたすける」こと、「人を育てる」こと、すなわち「おたすけ」と「丹精」に繋がっているわけです。

一人の人をよぶべくに「丹精」するためには、その道中、おたすけが欠かせません。このたすけが教会長・よぶべくの大切な御用です。

親神様は、陽気ぐらしを目標に人間世界を作られた。陽気ぐらしというのは、簡単に言えば、「親神様をや」と慕う私たち人間が、お互い、一れつ兄弟姉妹として、支え合い、補い合ひ、励まし合ひ、たすけ合う世界」です。ですから、親神様が、私たち人間に望まれていることは、一れつ兄弟姉妹としての「たすけ合ひ」であ

り

は、一れつ兄弟姉妹としての「たすけ合い」でありま
す。

「おたすけ」と聞けばですよ、何か相手を一方的にた
すけるような感じがしますが、決してそうではありま
せん。人間の親子を例にとつて考えてみてください。
例えば、困難に遭遇して悩み苦しんでいる弟や妹に、
その支えになつてやろうと手を差し伸べる兄や姉の
姿。その逆に、悩み苦しんでいる兄や姉になつ
てほしいと年下ながらも心を尽くしている弟や妹の
姿。これは形のうえでは、一方が手を差し伸べている
ことになりませんが、親から見ればどうでしょう。子供
同士がたすけ合つてゐる姿ですね。親にとつてこんな
うれしいことはありません。ですから、おたすけは、
親神様が望まれる一れつ兄弟姉妹の「たすけ合い」に
他ならないんです。

お道のお互いは、悩み苦しむ人に対して、その人を「本
当の兄弟姉妹」と思つて親身になつておたすけをさせ
ていただきたいものであります。

このおたすけで、まず第一に肝心なことは、言うまで
もなく「人をたすける心」であります。

「たすけ心・誠の心」？と教えられるように、人をた
すける誠の心を尽くすことであります。

『教祖伝逸話篇』「四二 人を救けたら」に、次のよ
うな話があります。

福井県に住むある男性が、娘の気の間違い、つまり精
神病を救けてもらいたいと西国巡礼をしていたとこ
ろ、茶店の主人から、「庄屋敷には生神様がござる。」

は、一れつ兄弟姉妹としての「たすけ合い」でありま
す。

「おたすけ」と聞けばですよ、何か相手を一方的にた
すけるような感じがしますが、決してそうではありま
せん。人間の親子を例にとつて考えてみると、~~たすけ~~
~~合~~い。例えば、困難に遭遇して悩み苦しんでいる弟や
妹に、その支えになつてやろうと手を差し伸べる兄や
姉の姿。その逆に、悩み苦しんでいる兄や姉になつ
てほしいと年下ながらも心を尽くしている弟や妹の
姿。これは形のうえでは、一方が手を差し伸べて
いることになりませんが、親から見れば、~~どうでしょう。~~
子供同士がたすけ合つてゐる姿ですね。親にとつてこ
んなにうれしいことはありません。ですから、おたす
けは、親神様が望まれる一れつ兄弟姉妹の「たすけ合
い」に他ならないのです。

お道のお互いは、悩み苦しむ人に対して、その人を「本
当の兄弟姉妹」と思つて親身になつておたすけをさせ
ていただきたいものであります。

このおたすけで、まず第一に肝心なことは、言うまで
もなく「人をたすける心」であります。

「たすけ心・誠の心」？と教えられるように、人をた
すける誠の心を尽くすことであります。

『教祖伝逸話篇』「四二 人を救けたら」に、次のよ
うな話があります。

福井県に住むある男性が、娘の気の間違い、つまり(精
神病)を救けてもらいたいと西国巡礼をしていたとこ
ろ、茶店の主人から、「庄屋敷には生神様がござる。」

「おたすけ」と聞けば、何か相手を一方的にたすける
ような感じがしますが、決してそうではありません。
人間の親子を例にとつて考えてみると、例えば、困難
に遭遇して悩み苦しんでいる弟や妹に、その支えに
なつてやろうと手を差し伸べる兄や姉の姿。その逆に、
悩み苦しんでいる兄や姉に、元氣になつてほしいと年
下ながらも心を尽くしている弟や妹の姿。これは形の
うえでは、一方が手を差し伸べていることになりま
す。親にとつてこんなうれしいことはありませんか
ら、おたすけは、親神様が望まれる一れつ兄弟姉妹の
「たすけ合い」に他ならないのです。

お道のお互いは、悩み苦しむ人に対して、その人を「本
当の兄弟姉妹」と思つて親身になつておたすけをさせ
ていただきたいものです。

このおたすけで、まず第一に肝心なことは、言うまで
もなく「人をたすける心」です。人をたすける誠の心
を尽くすことです。

『教祖伝逸話篇』「四二 人を救けたら」に、次のよ
うな話があります。

福井県に住むある男性が、娘の気の間違い(精神病)を
救けてもらいたいと、教祖にお願いすると、教祖は、
「村にかえつたら、各家を訪ねて、四十二人の人を救

と聞いて、早速、お屋敷へ帰って、教祖に「なんとか、娘を助けて頂きたい」とお願いをされました。すると、教祖は、「村にかえったら、各家を訪ねて、四十二人の人を救けるのやで。なむてんりわうのみこと、と唱えて、手を合わせて神さんをしっかり拝んで廻わるのやで。人救けたら我が身が救かるのや。」とのお言葉がありました。その男性は、藁にも縋る思いで、この教祖のお言葉を素直に実行したんです。村中をに、いかに廻わり、病人さんの居る家には何度も足を運んで、四十二人の平癒を拝み続けたところ、不思議にも、娘の気の病は全快のご守護を頂いて、養子をもらう喜びまでお与えいただいた、という話です。逸話篇載っています。

この逸話を讀んだときに、拝んだ人の人は果たしてたすかったんだろうかって、ご守護いただいたんだろうかと考えたことがあります。

しかし、この逸話では、そのことは問題ではないんです。ご守護をくださるのは親神様であって、ご守護いただくかどうかは、親神様の範疇であります。

つまり、この逸話で最も大切な部分は、この男性が人の身上平癒を拝み続けたということ。「この病人さんをなんとかおたすけ下さいませ」と真剣に願っていた誠の心を、親神様がお受け取りくださって、娘さんにご守護をいただいたということでありませぬ。——この逸話は、私たちよぶべくに「人をたすける誠の心の大切さ」を、教えてくださっているのであります。おたすけにあたっては、このように人をたすける誠の

と聞いて、早速、お屋敷へ帰って、教祖に「なんとか、娘を助けて頂きたい」とお願いをされました。すると、教祖は、「村にかえったら、各家を訪ねて、四十二人の人を救けるのやで。なむてんりわうのみこと、と唱えて、手を合わせて神さんをしっかり拝んで廻わるのやで。人救けたら我が身が救かるのや。」とのお言葉がありました。その男性は、藁にも縋る思いで、この教祖のお言葉を素直に実行したんです。村中をに、いかに廻わり、病人さんの居る家には何度も足を運んで、四十二人の平癒を拝み続けたところ、不思議にも、娘の気の病は全快のご守護を頂いて、養子をもらう喜びまでお与えいただいた、という話です。逸話篇載っています。

この逸話を讀んで、拝んだ人の人は果たしてたすかったの、ご守護いただいたの、かと思いましたが、この逸話では、そのことは問題ではありませぬ。ご守護をくださるのは親神様であって、ご守護いただくかどうかは、親神様の範疇であります。

つまり、この逸話で最も大切な部分は、この男性が人の身上平癒を拝み続けたということ。「この病人さんをなんとかおたすけ下さいませ」と真剣に願っていた誠の心を、親神様がお受け取りくださり、娘さんにご守護をいただいたこと、でありませぬ。——この逸話は、私たちよぶべくに「人をたすける誠の心の大切さ」を、教えてくださっているのであります。おたすけにあたっては、このように人をたすける誠の

けるのやで。なむてんりわうのみこと、と唱えて、手を合わせて神さんをしっかり拝んで廻わるのやで。人救けたら我が身が救かるのや。」とのお言葉があった。その男性は、藁にも縋る思いで、この教祖のお言葉を素直に実行、村中をに、いかに廻わり、病人の居る家には何度も足を運んで、四十二人の平癒を拝み続けるところ、不思議にも、娘の気の病は全快のご守護を頂いて、養子をもらう喜びまでお与えいただいた、という話です。

この逸話を讀んで、拝んだ人の人は果たしてたすかったのか、ご守護いただいたのかと考えたことがあります。この逸話では、そのことは問題ではありませぬ。ご守護をくださるのは親神様であって、ご守護いただくかどうかは、親神様の範疇です。

つまり、この逸話で最も大切な部分は、この男性が人の身上平癒を拝み続けたということ。「この病人さんをなんとかおたすけ下さいませ」と真剣に願っていた誠の心を、親神様がお受け取りくださり、娘さんにご守護をいただいたこと。——この逸話は、私たちよぶべくに「人をたすける誠の心の大切さ」を、教えているのです。おたすけにあたっては、このように人をたすける誠の

心をもって掛かることが大事ですが、ただ願うだけでなく、そのうえで、なおも大切なことは、その人にたすかっていたいたくために、親神様にお受け取りいただけるだけの真実をいかに尽くすかということでもあります。

コロナ以前に教祖殿の当番を勤めていたときの話ですが、教服を着てお守所から出たところに、見ず知らずの青年さんから声が掛けられた。「先生」、もうあの辺りで教服着てたら「先生」です。皆さんも本部で「先生」と呼ばれたかったら、教服でうろうろしてください。それから言うてくださるでしょう。それはせんとつてください、私は保安室長ですから、直ぐ、止めに行かないけませんからね。「先生」と言われた。「先生、教祖のお下がりをお願いできませんか」と尋ねられた。お下がりを奥行つたらあるでしょう。いくら「先生」でも勝手に教祖殿に入って、教祖のお下がりを取った怒られます。「どうしたの？」って訊いたんです。そうすると「実は、昨日の夕方に、友達が突然の病気で倒れて病院に運び込まれました。すぐに駆けつけておさづけを取り次いだんですが、友人の苦しそうな顔を見たら、居ても立ってもおれなくなつて、おちばへお願いに帰ってきました。その彼にお下がりを持って、またおたすけに行きたいんです」ということです。もちろん手元にお下がりがありませんでしたので「それじゃ、お御供さんをいただきますよ」とお御供さんは、これもご存命の教祖にお供えをしたご洗米ですね、そのお下がりだから、ここには教祖の存命の理が籠っている。お守所で理立てをしたら頂戴できるから、それ

心をもって掛かることが大事ですが、ただ願うだけでなく、そのうえで、なおも大切なことは、その人にたすかっていたいたくために、親神様にお受け取りいただけるだけの真実をいかに尽くすかということでもあります。

コロナ以前に、教祖殿の当番を勤めていたときの話ですが、教服を着てお守所から出たところに、見ず知らずの青年さんから声が掛けられた。「先生」、もうあの辺りで教服着てたら「先生」です。皆さんも本部で「先生」と呼ばれたかったら、教服でうろうろしてください。それから言うてくださるでしょう。それはせんとつてください、私は保安室長ですから、直ぐ、止めに行かないけませんからね。「先生」と言われた。「先生、教祖のお下がりをお願いできませんか」と尋ねられた。お下がりを奥行つたらあるでしょう。いくら「先生」でも勝手に教祖殿に入って、教祖のお下がりを取った怒られます。「どうしたの？」って訊いたんです。そうすると「実は、昨日の夕方に、友達が突然の病気で倒れて病院に運び込まれました。すぐに駆けつけておさづけを取り次いだんですが、友人の苦しそうな顔を見たら、居ても立ってもおれなくなつて、おちばへお願いに帰ってきました。その彼にお下がりを持って、またおたすけに行きたいんです」ということです。もちろん手元にお下がりがありませんでしたので「それじゃ、お御供さんをいただきますよ」とお御供さんは、これもご存命の教祖にお供えをしたご洗米ですね、そのお下がりだから、ここには教祖の存命の理が籠っている。お守所で理立てをしたら頂戴

心をもって掛かることが大事ですが、ただ願うだけでなく、そのうえで、なおも大切なことは、その人にたすかっていたいたくために、親神様にお受け取りいただけるだけの真実をいかに尽くすかということです。

以前、教祖殿当番を勤めていたときのこと、教服を着てお守所から出たところに、見ず知らずの青年さんから声が掛けられた。「先生、教祖のお下がりをお願いできませんか」と尋ねられた。「どうしたの？」と訊くと「実は、昨夕、友達が突然の病気で倒れて病院に運び込まれました。すぐに駆けつけておさづけを取り次いだんですが、友人の苦しそうな顔を見たら、居ても立ってもおれなくなつて、おちばへお願いに帰ってきました。その彼にお下がりを持って、またおたすけに行きたい」とのこと。「それじゃ、お御供さんをいただきますよ」。お御供さんは、これもご存命の教祖にお供えをしたご洗米のお下がりだから、ここには教祖の存命の理が籠っている。お守所で理立てをしたら頂戴できるから、それを持って友人のおたすけに行つて」と伝えた。本人は、早速、お御供をいただいて、教祖殿でご存命の働きを真剣に願つて、友人のもとにおたすけに舞い戻りました。この青年は教会長でも後継者でもありません、サラリーマンの一ふぶぐです。それも「福岡から帰ってきた」と言っていました。その彼は、「身の上になった友人をたすけていただきたい」と、大切な一日を友人のためにお供えをした。福岡から新幹線で帰れば往復3万円は掛かるでしょう。それを身銭を切つて、友人のためにこれを尽くした。友人のご守護

を持って友人のおたすけに行つといで」と伝えたんです。本人は「ありがとうございます」と、「そうさせてもらいます」と、早速、お御供をいただいて、教祖殿でご存命の働きを真剣に願って、友人のもとにおたすけに舞い戻ったのであります。この青年は教会長でもありませんし後継者でもありません、サラリーマンをしている一よふぼくであります。それも「福岡から帰ってきた」と言うていました。その彼は、「身上になった友人をたすけていただきたい」と、大切な一日を友人のためにお供えをした。福岡から新幹線で帰れば往復3万円は掛かるでしょう。それを身銭を切つて、友人のためにこれを尽くしたのであります。実に素晴らしいよふぼくの姿じゃないですか。

年祭活動は「たすけの旬」であり、それはまた「たすかる旬」でもあります。しかし、必ず奇跡的なご守護をいただけるとも限りません。

ある布教師の話です。――癌の進行が進んで治る見込みがなく家族も覚悟を決めていた方のおたすけに掛かった。「必ずたすかります」と、毎日通った。「なんとかたすかっていたきたい」と、連日十二下りのお願いづとめをし、身上平癒におちばまで歩いて足を運び、水垢離もし、断食もしておたすけに通ったけれども、結局は出直されてしまった。そのとき、その布教師は、家族に対して「私の真実が足りませんでした」と泣いてお詫びをするんです。家族の方々は「私たち

できるから、それを持って友人のおたすけに行つといで」と伝えたんです。本人は「ありがとうございます」と、「そうさせてもらいます」と、早速、お御供をいただいて、教祖殿でご存命の働きを真剣に願って、友人のもとにおたすけに舞い戻りました。この青年は教会長でもありません、サラリーマンをしています。それも「福岡から帰ってきた」と言うていました。その彼は、「身上になった友人をたすけていただきたい」と、大切な一日を友人のためにお供えをした。福岡から新幹線で帰れば往復3万円は掛かるでしょう。それを身銭を切つて、友人のためにこれを尽くしたのであります。実に素晴らしいよふぼくの姿じゃないですか。

年祭活動は「たすけの旬」であり、それはまた「たすかる旬」でもあります。しかし、必ず奇跡的なご守護をいただけるとも限りません。

ある布教師の話です。――癌の進行が進んで治る見込みがなく家族も覚悟を決めていた方のおたすけに掛かった。「必ずたすかります」と、毎日通った。「なんとかたすかっていたきたい」と、連日十二下りのお願いづとめをし、身上平癒におちばまで歩いて足を運び、水垢離もし、断食もしておたすけに通ったけれども、結局は出直されてしまった。そのとき、その布教師は、家族に対して「私の真実が足りませんでした」と泣いてお詫びをするんです。家族の方々は「私たち

を願って、自らが真実を尽くしたのです。実に素晴らしいよふぼくの姿ではないですか。

年祭活動は「たすけの旬」であり、それはまた「たすかる旬」でもあります。しかし、必ず奇跡的なご守護をいただけるとも限りません。

ある布教師の話。――癌の進行が進んで治る見込みがなく家族も覚悟を決めていた方のおたすけに掛かった。「必ずたすかります」と、毎日通った。「なんとかたすかっていたきたい」と、連日十二下りのお願いづとめをし、身上平癒におちばまで歩いて足を運び、水垢離もし、断食もしておたすけに通ったけれども、結局は出直してしまった。そのとき、その布教師は、家族に対して「私の真実が足りませんでした」と泣いて詫びた。家族は「私たちですら諦めていたのに、こ

ですら諦めていたのに、この人は、毎日一生懸命にお願いをしてくれ、死んだら自分のせいだと泣いてお詫びまでしてくれる」と、この布教師の真実が、家族の心を揺り動かして、信仰の道に入ってくれましたという話を、以前、聞かせてもらいました。

身上たすけにおいて、結果として、奇跡的なご守護をいただけませんでした。この布教師の尽くした真実を、親神様がお受け取りくださって、そのご家族が「真にたすかる道」へと導きただけなんです。

こうしたご守護の姿もあるのであります。不思議なたすけが上がるかどうかということは、これは飽くまでも親神様の範疇であります。親神様にお任せするより他ありません。

私たちよふぼくにできることは、「この人になんとかたすかっていただきたい」と、ひたすらに真剣に存命の教祖に縋りお願いを申し上げる、人をたすける誠の心を尽くすことであります。

そして、「この人のために、私は、何ができるのか」と思案をして、親神様にお受け取りいただけるだけの真実を尽くすことであります。この誠真実によって、相手がたすかり、「人を救って我が身救かる」というご守護がいただけるんです。本当におたすけはありがたいですね。

私の卑近な体験から、「諭達」に記されている教祖の3つの教えを思案いたしました。教祖のひながたの道は、私たちが陽気ぐらしいの道を通るためのお手本であります。私たちがこの道を歩む中

ちですら諦めていたのに、この人は、毎日一生懸命にお願いをしてくれ、死んだら自分のせいだと泣いてお詫びまでしてくれる」と、この布教師の真実が、家族の心を揺り動かして、信仰の道に入ってくれましたという話を、以前、聞かせてもらいました。

身上たすけにおいて、結果として、奇跡的なご守護をいただけませんでした。この布教師の尽くした真実を、親神様がお受け取りくださって、そのご家族が「真にたすかる道」へと導きただけなんです。

こうしたご守護の姿もあるのであります。不思議なたすけが上がるかどうかということは、これは飽くまでも親神様の範疇、ではありません。親神様にお任せするより他ありません。

私たちよふぼくにできることは、「この人になんとかたすかっていただきたい」と、ひたすらに真剣に存命の教祖に縋りお願いを申し上げる、人をたすける誠の心を尽くすことであります。

そして、「この人のために、私は、何ができるのか」と思案し、親神様にお受け取りいただけるだけの真実を尽くすことであります。この誠真実によって、相手がたすかり、「人を救いたら我が身救かる」というご守護がいただけるんです。本当におたすけはありがたいですね。

私の卑近な体験から、「諭達」に記された教祖の3つの教えを思案いたしました。教祖のひながたの道は、私たちが陽気ぐらしいの道を通るためのお手本です。私たちがこの道を歩む中

の人は、毎日一生懸命にお願いをしてくれ、死んだら自分のせいだと泣いてお詫びまでしてくれる」と、この布教師の真実が、家族の心を揺り動かして、信仰の道に入ってくれた。

身上たすけにおいて、結果として、奇跡的なご守護をいただけませんでした。この布教師の尽くした真実を、親神様がお受け取りくださって、その家族が「真にたすかる道」へと導かれたのです。

こうしたご守護の姿もあるのであります。不思議なたすけが上がるかどうかは、飽くまでも親神様の範疇、親神様にお任せするより他ありません。

私たちよふぼくにできることは、「この人になんとかたすかっていただきたい」と、ひたすらに真剣に存命の教祖に縋りお願いを申し上げる、人をたすける誠の心を尽くすことです。

そして、「この人のために、私は、何ができるのか」と思案し、親神様にお受け取りいただけるだけの真実を尽くすことです。この誠真実によって、相手がたすかり、「人を救いたら我が身救かる」というご守護がいただけるんです。本当におたすけはありがたいですね。

私の卑近な体験から、「諭達」に記された教祖の3つの教えを思案しました。教祖のひながたの道は、私たちが陽気ぐらしいの道を通るためのお手本です。私たちがこの道を歩む中に、思

に、思案にされることや何かの岐路に立つことがありますが、そうしたときには「教祖ならどうなさるだろうか」・「教祖ならいかようにお考えなさるだろうか」と、この思案に立つて、行動に移すことが大切だと思います。決して教祖を見失わないことでもあります。たすけの手を差し伸べてくださっている教祖に、私たちの方から一歩でも二歩でも近づかせていただいて、この旬に、あらためて教祖のひながたを目標に、教えを素直に実践させていただきたいと思えます。

「諭達」に示された旬の歩み方

さて、私たちの身の回りや世界に目を移したときに、「諭達」に、

今日、世の中には、他者への思いやりを欠いた自己主張や、刹那的行動があふれ、人々は、己が力を過信し、…心の闇路をさまよっている。

とお示しいただく通りの姿が目に見えてまいります。争いや混乱が絶えることなく陽気ぐらしには程遠い現状と言わざるを得ません。

今のこの世の中に対して、じゃあ、私たちお道の者は何ができるのでしょうか。

もちろん、今の状況をひっくり返すような大きなことはできませんが、私たちにできることは、一人ひとりが教祖から教えていただいた陽気ぐらしの教えを実践して、その姿を身近なところから周囲に映していくことだと思えます。コツコツとした歩みであります、これを積み重ねていくしかありません。

に、思案にされることや何かの岐路に立つことがありますが、そうしたときには「教祖ならどうなさるだろうか」・「教祖ならいかようにお考えなさるだろうか」と、この思案に立つて、行動に移すことが大切だと思います。決して教祖を見失わないことでもあります。たすけの手を差し伸べてくださっている教祖に、私たちの方から一歩でも二歩でも近づかせていただいて、この旬に、あらためて教祖のひながたを目標に、教えを素直に実践させていただきたいと思えます。

「諭達」に示された旬の歩み方

さて、私たちの身の回りや世界に目を移したときに、「諭達」に、

今日、世の中には、他者への思いやりを欠いた自己主張や、刹那的行動があふれ、人々は、己が力を過信し、**我が身思案に流れ**、心の闇路をさまよっている。

と示されるただ通りの姿が目に見えてまいります。争いや混乱が絶えることなく陽気ぐらしには程遠い現状と言わざるを得ません。

では、今のこの世の中に対して、**じゃあ**、私たちお道の者は何ができるのでしょうか。

もちろん、今の状況をひっくり返すような大きなことはできませんが、私たちにできることは、一人ひとりが教祖から教えていただいた陽気ぐらしの教えを実践して、その姿を身近なところから周囲に映していくことだと思えます。コツコツとした歩み**ではありません**、これを積み重ねていくしかありません。

案にされることや何かの岐路に立つことがありますが、そうしたときには「教祖ならどうなさるだろうか」・「教祖ならいかようにお考えなさるだろうか」と、この思案に立つて、行動に移すことが大切だと思います。決して教祖を見失わないことです。たすけの手を差し伸べてくださっている教祖に、私たちの方から一歩でも二歩でも近づいて、この旬に、あらためて教祖のひながたを目標に、教えを素直に実践したい。

「諭達」に示された旬の歩み方

さて、私たちの身の回りや世界に目を移したときに、「諭達」に、

今日、世の中には、他者への思いやりを欠いた自己主張や、刹那的行動があふれ、人々は、己が力を過信し、我が身思案に流れ、心の闇路をさまよっている。

と示される姿が目に見えます。争いや混乱が絶えることなく陽気ぐらしには程遠い現状と言わざるを得ません。

では、今のこの世の中に対して、私たちお道の者は何ができるのでしょうか。

もちろん、今の状況をひっくり返すような大きなことはできませんが、私たちにできることは、一人ひとりが教祖から教えていただいた陽気ぐらしの教えを実践して、その姿を身近なところから周囲に映していくことだと思えます。コツコツとした歩みですが、これを積み重ねていくしかありません。

そこで、じゃ、この旬に私たちよふぼくとしてはどのように歩んだらいいのか、これについて、「諭達」に、

よふぼくは、進んで教会に足を運び、日頃からひのきいんに励み、家庭や職場など身近なところから、いがかげを心掛けよう。身上、事情で悩む人々には、親身に寄り添い、おつとめで治まりを願い、病む者にはおさづけを取り次ぎ、真にたすかる道があることを伝えよう。親神様は真実の心を受け取って、自由の御守護をお見せ下される。

とお示してくださるのであります。

ここに記されているよふぼくの歩み、今の旬の歩みですが、これはもうご覧いただいたら皆さんよくわかるように、よふぼくとしての基本的な信仰実践であります。乱暴な言い方をすれば、よふぼくとしてやっつて当然のことだと言えますが、しかしながら、これができていないという現実もあると思います。

これをよふぼく皆が実践すれば、陽気ぐらしへの道は一段と進むに違いありません。

そこで、皆様方にお願いをしたいのは、ここに集う皆さん方は、教会長さんや教会長さんの奥さん、また布教所長さんなど、教会の主立つ方々であります。つまり、人を導き育てる立場である皆さん方が、まずこれを率先して実行することを心がけて、陽気ぐらしへの歩みを進めていただきたいのであります。

「陽気ぐらし」を人に説く者が、陽気ぐらしを忘れてしまつては話になりません。短気な人に「腹を立てる

そこで、~~じゃ~~では、この旬に私たちよふぼくとしてはどのように歩んだらいいのか、~~これ~~について、「諭達」に、

よふぼくは、進んで教会に足を運び、日頃からひのきいんに励み、家庭や職場など身近なところから、いがかげを心掛けよう。身上、事情で悩む人々には、親身に寄り添い、おつとめで治まりを願い、病む者にはおさづけを取り次ぎ、真にたすかる道があることを伝えよう。親神様は真実の心を受け取って、自由の御守護をお見せ下される。

~~とお示されて~~と示されています。

ここに記されているよふぼくの歩み(今の旬の歩み)ですが、これはもうご覧いただいたら皆さんよくわかるように、よふぼくとしての基本的な信仰実践~~であり~~、~~もよほ~~、よふぼくとして当然のこととも言えますが、しかしながら、これができていないという現実もあると思います。

これをよふぼく皆が実践すれば、陽気ぐらしへの道は一段と進むに違いありません。

そこで、皆様方にお願いをしたいのは、ここに集う皆さん方は、~~教会長さんや教会長さんの奥さん~~、~~また~~布教所長さんなど、教会の主立つ方々であります。つまり、人を導き育てる立場である皆さん方が、まずこれを率先して実行することを心がけて、陽気ぐらしへの歩みを進めていただきたいのであります。

「陽気ぐらし」を人に説く者が、陽気ぐらしを忘れてしまつては話になりません。短気な人に「腹を立てる

そこで、では、この旬に私たちよふぼくとしてはどのように歩んだらいいのかについて、「諭達」に、

よふぼくは、進んで教会に足を運び、日頃からひのきいんに励み、家庭や職場など身近なところから、いがかげを心掛けよう。身上、事情で悩む人々には、親身に寄り添い、おつとめで治まりを願い、病む者にはおさづけを取り次ぎ、真にたすかる道があることを伝えよう。親神様は真実の心を受け取って、自由の御守護をお見せ下される。

と示されています。

ここに記されているよふぼくの歩み(今の旬の歩み)ですが、これは、よふぼくとしての基本的な信仰実践、よふぼくとして当然のこととも言えますが、しかしながら、これができていないという現実もあると思います。

これをよふぼく皆が実践すれば、陽気ぐらしへの道は一段と進むに違いありません。

そこで、皆様方にお願いをしたいのは、ここに集う皆さん方は、教会長やその配偶者、布教所長など、教会の主立つ方々です。つまり、人を導き育てる立場である皆さん方が、まずこれを率先して実行することを心がけて、陽気ぐらしへの歩みを進めていただきたいのであります。

「陽気ぐらし」を人に説く者が、陽気ぐらしを忘れてしまつては話になりません。短気な人に「腹を立てる

な」と言われても聞けぬ相談であります。高慢な人に「心を低くして通れ」と言われても飲めぬ話であります。何の説得力も持ちません。

身近なところから「丹精」

まずは、私を含めて、ここに集う立場のお互いが、「諭達」に示してくださった旬の歩みを、一つひとつ実践して、身近なところから陽気ぐらしを世の中に映していくことが肝心であります。

そして、自ら実践しつつ、所属のよふぼくや理の子にも動いてもらい、成人してもらわねばなりません。これは一にかかって、教会長の「丹精」、理の親の「丹精」にあると思います。

しかし「なんとか聴き分けてもらおう」・「成人していただく」と思っても、相手がそれを受け入れてくれなければどうにもなりません。

けれども、教会長が理の子から信頼をされていれば、慕われていけば、たとえ、厳しい仕込みであっても受け入れてくれるのであります。そのためには、普段から、「足を運び」・「心を通わせ」・「世話をすること」であります。

つまり、「丹精」の基本は、「足を運び」・「心を通わせ」・「世話をすること」の3つだと思えます。

そして、よふぼくや理の子に何かあったら、飛んで行っていただきたいんです。かなりの日数が経ってから行ったのでは、お見舞いにしかりません。すぐに行けばおたすけになります。おたすけとお見舞いとは受ける側の気持ちは全然違います。

な」と言われても聞けぬ相談で~~あります~~。高慢な人に「心を低くして通れ」と言われても飲めぬ話で~~ありま~~す。何の説得力も持ちません。

身近なところから「丹精」

まずは、私を含めて、ここに集う立場のお互いが、「諭達」に示~~され~~て~~く~~だ~~さ~~った旬の歩みを、一つひとつ実践して、身近なところから陽気ぐらしを世の中に映していくことが肝心で~~あり~~ます。

そして、自ら実践しつつ、所属のよふぼくや理の子にも動いてもらい、成人~~を~~してもらわねばなりません。これは一にかかって、教会長の「丹精」、理の親の「丹精」にあると思います。

しかし「なんとか聴き分けてもらおう」・「成人していただく」と思っても、相手がそれを受け入れてくれなければどうにもなりません。

けれども、教会長が理の子から信頼~~を~~されていれば、慕われていけば、たとえ、厳しい仕込みであっても受け入れてくれるので~~あり~~ます。そのためには、普段から、「足を運び」・「心を通わせ」・「世話をすること」で~~あり~~ます。

つまり、「丹精」の基本は、「足を運び」・「心を通わせ」・「世話をすること」の3つだと思えます。

そして、よふぼくや理の子に何かあったら、飛んで行っていただきたい~~れ~~です。かなりの日数が経ってから行ったのでは、お見舞いにしかりません。すぐに行けばおたすけになります。おたすけとお見舞いとは受ける側の気持ちは全然違います。

な」と言われても聞けぬ相談です。高慢な人に「心を低くして通れ」と言われても飲めぬ話です。何の説得力も持ちません。

身近なところから「丹精」

まずは、私を含めて、ここに集う立場のお互いが、「諭達」に示された旬の歩みを、一つひとつ実践して、身近なところから陽気ぐらしを世の中に映していくことが肝心です。

そして、自ら実践しつつ、所属のよふぼくや理の子にも動いてもらい、成人してもらわねばなりません。これは一にかかって、教会長の「丹精」、理の親の「丹精」にあると思います。

しかし「なんとか聴き分けてもらおう」・「成人していただく」と思っても、相手がそれを受け入れてくれなければどうにもなりません。

けれども、教会長が理の子から信頼されていれば、慕われていけば、たとえ、厳しい仕込みであっても受け入れてくれるのです。そのためには、普段から、「足を運び」・「心を通わせ」・「世話をすること」です。

つまり、「丹精」の基本は、「足を運び」・「心を通わせ」・「世話をすること」の3つだと思えます。

そして、よふぼくや理の子に何かあったら、飛んで行っていただきたい。かなりの日数が経ってから行ったのでは、お見舞いにしかりません。すぐに行けばおたすけになります。おたすけとお見舞いとは受ける側の気持ちは全然違います。

「あの辛いときに、苦しいときに、会長さんはすぐ来てくださった」ということが、理の子にとって忘れることのできない心の宝になるのであります。困ったときに頼りになるのが教会長であります。おたすけが一番の「丹精」になるということを心においていただきたいと思ひます。

よふぼくは、いんねんあつて、親神様が教会に繋げてくださったのであります。普段からよふぼく・信者に心を繋ぎ、足を運ぶ、遠方であるからといって放っておかずに、折を見て、年に数度は足を運んでいただきたいと思ひます。

よふぼくにとつて、教会から流される旬の声はたすけの綱であります。教会長の取り次ぐおさづけは命の綱とも言えるのであります。

所属するよふぼく・信者が、時旬の歩みを勇んで進めて、ともに成人につとめ励むことができるように、どうか、皆さん、本気になって、しっかりと「丹精」に励んでくださることをお願いしたいのであります。

道は末代：縦の伝道

またよふぼくや理の子の「丹精」と同様に、忘れてはならないのが、次の世代を「育てる」ことでもあります。「諭達」にも、この旨お述べくださっています。これは、大切なご用です。

「道は末代」と教えられるように、この道は、陽気ぐらし世界の実現を目指して、末代、続いて行かねばなりません。「道」は歩いてこそその道であつて、歩く者がいなければならぬ。「道」は道でなくなりません。

「あの辛いときに、苦しいときに、会長さんはすぐ来てくださった」ということが、理の子にとって忘れることのできない心の宝になるのであります。困ったときに頼りになるのが教会長であります。おたすけが一番の「丹精」になるということを心においていただきたいと思ひます。

よふぼくは、いんねんあつて、親神様が教会に繋げてくださいました。普段からよふぼく・信者に心を繋ぎ、足を運ぶ、遠方であるからといって放っておかずに、折を見て、年に数度は足を運んでいただきたいと思ひます。

よふぼくにとつて、教会から流される旬の声はたすけの綱であります。教会長の取り次ぐおさづけは命の綱とも言えるのであります。

所属するよふぼく・信者が、時旬の歩みを勇んで進めて、ともに成人につとめ励むことができるように、どうか、皆さん、本気になって、しっかりと「丹精」に励んでくださることをお願いしたいのであります。

道は末代：縦の伝道

またよふぼくや理の子の「丹精」と同様に、忘れてはならないのが、次の世代を「育てる」ことでもあります。「諭達」にも、この旨が述べられています。これは、大切なご用です。

「道は末代」と教えられるように、この道は、陽気ぐらし世界の実現を目指して、末代、続いて行かねばなりません。「道」は歩いてこそその道であつて、歩く者がいなければならぬ。「道」は道でなくなりません。

「あの辛いときに、苦しいときに、会長さんはすぐ来てくださった」ということが、理の子にとって忘れることのできない心の宝になるのであります。困ったときに頼りになるのが教会長です。おたすけが一番の「丹精」になるということを心においていただきたいと思ひます。

よふぼくは、いんねんあつて、親神様が教会に繋げてくださいました。普段からよふぼく・信者に心を繋ぎ、足を運ぶ、遠方であるからといって放っておかずに、折を見て、年に数度は足を運んでいただきたいと思ひます。

よふぼくにとつて、教会から流される旬の声はたすけの綱、教会長の取り次ぐおさづけは命の綱とも言えるのです。

所属するよふぼく・信者が、時旬の歩みを勇んで進めて、ともに成人につとめ励むことができるように、どうか、皆さん、本気になって、しっかりと「丹精」に励んでくださることをお願いしたいのです。

道は末代：縦の伝道

またよふぼくや理の子の「丹精」と同様に、忘れてはならないのが、次の世代を「育てる」ことです。「諭達」にも、この旨が述べられています。これは、大切なご用です。

「道は末代」と教えられるように、この道は、陽気ぐらし世界の実現を目指して、末代、続いて行かねばなりません。「道」は歩いてこそその道であつて、歩く者がいなければならぬ。「道」は道でなくなりません。

そこで、皆さん、「末代」と聞けば、何か、遙か先のことに目が行きがちですが、私たちは、わずか100年先や200年先のことですら、分からないんです、誰にも分かりません。何も見えませんね。しかし、はっきりと見えているものがあります。はっきりと見えているのは、次の世代であります。

「道」が末代であるためには、次の世代を「育てる」ことです。これを、常に意識して、コツコツと、しかも積極的に取り組むことであります。

この「信仰の継承」について、以前、前真柱様が、駅伝のバトンに例えてお話しくださったことが、私には、強く印象に残っているんです。駅伝とは、スタートからゴールまでバトンであるタスキを繋いで走る競技です。その道程には長い距離の区間もあれば短い区間もあります。平坦な道もあれば上り坂・下り坂もあります。チームの監督は、それぞれ、この区間はこの者と、この区間はこの者ならばという選手を選んで、選ばれた選手は、その思いに添えて、与わった区間を精一杯走りきって、次へとバトンを渡して、ゴールを目指す。これが駅伝です、皆さん、ご承知のことではありますが。これを信仰に置き換えれば、スタートは入信の元一日であり、ゴールは陽気ぐらしの世界であって、ここを目指して、私たちは、代々と、信仰のバトンを渡していくのであります。その道程も長い距離や短い距離、平坦な道もあれば上り坂・下り坂もあります。それに相応しい区間を、親神様は、私たち一人ひとりに、与えて下さっている。私たちは、親神様から託されているわけですね。

そこで、皆さん、「末代」と聞けば、何か、遙か先のことに目が行きがちですが、私たちは、わずか100年先や200年先のことですら、~~分からないんです、誰にも分かりません。何も見えませんね。~~しかし、はっきりと見えているものがあります。~~はっきりと見えているのは、次の世代であります。~~

「道」が末代であるためには、次の世代を「育てる」~~こと~~です。これを、常に意識して、コツコツと、しかも積極的に取り組むことであります。

この「信仰の継承」について、以前、前真柱様が、駅伝のバトンに例えてお話し~~くださったことがあり~~ます、私には、強く印象に残っているんです。駅伝とは、スタートからゴールまでバトンであるタスキを繋いで走る競技です。その道程には長い距離の区間もあれば短い区間もありません。平坦な道もあれば上り坂・下り坂もありません。チームの監督は、それぞれ、この区間はこの者と、この区間はこの者ならばという選手を選んで、選ばれた選手は、その思いに添えて、与わった区間を精一杯走りきって、次へとバトンを渡して、ゴールを目指す。これが駅伝です、皆さん、ご承知のことではありますが。これを信仰に置き換えれば、スタートは入信の元一日であり、ゴールは陽気ぐらしの世界であって、ここを目指して、私たちは、代々と、信仰のバトンを渡していくのであります。その道程も長い距離や短い距離、平坦な道もあれば上り坂・下り坂もあります。それに相応しい区間を、親神様は、私たち一人ひとりに、与えて下さっている。私たちは、親神様から託されて

そこで、皆さん、「末代」と聞けば、何か、遙か先のことに目が行きがちですが、私たちは、わずか100年先や200年先のことですら、誰にも分かりません。何も見えません。しかし、はっきりと見えているものがある。それは、次の世代です。

「道」が末代であるためには、次の世代を「育てる」こと。これを、常に意識して、コツコツと、しかも積極的に取り組むことです。

この「信仰の継承」について、以前、前真柱様が、駅伝のバトンに例えて話されたことがあります。駅伝を信仰に置き換えれば、スタートは入信の元一日、ゴールは陽気ぐらしの世界、ここを目指して、私たちは、代々と、信仰のバトンを渡していくのです。その道程も長い距離や短い距離、平坦な道もあれば上り坂・下り坂もあります。それに相応しい区間を、親神様は、私たち一人ひとりに、与えて下さっている。私たちは、親神様から託されている。

いるわけですね。

現在、平坦な道を快走するように順調に道を進んでいる教会もあるでしょうし、苦心や苦勞をしながら上り坂を息を切らして走っているところもあるでしょう。中には、もう歩くだけでも辛いような、ガタゴト道や砂利道に遭遇している方もおられるかもしれません。でも「今のこの道を通ることができるとは、お前しかいないんだ、頼んだぞ」と、親神様が託してくださいっている道中だと思えば、何か、心に力と勇気が湧いてくるじゃないですか。

私たち一人ひとりに親神様からお掛けくださっているご期待と親心にお応えさせていただきながら、次にバトンを渡すのが、私たちの役目でありませう。「そのとき」になって、一生懸命にやっける「私の信仰」を継いでくれる者がなければ、寂しい限りであります。

先人が、懸命に通ってきた信仰のバトンを受けて、私たち一人ひとりが、今、この道を歩んでいます。その、私たちの命には限りがあります。つまり、誰もが、信仰のバトンを渡すときが必ず来るのであります。「そのとき」に、「後は頼んだぞ」と、次の者に、安心して、バトンを渡してやりたいじゃないですか。そのためにも、私たちの、まず、この次の世代をしっかりと「育成」することでありませう。これからの道の将来を担っていく次の世代の「育成」に、この旬に、あらためて、力を入れることでありませう。

信仰の喜びを親から子へ、子から孫へと繋いでいく「縦の伝道」は、今の旬の、最も大切な御用の一つとお考

現在、平坦な道を快走するように順調に道を進んでいる教会もあれば、苦心や苦勞をしながら上り坂を息を切らして走っているところもあるでしょう。中には、もう歩くだけでも辛いような、ガタゴト道や砂利道に遭遇している方もおられるかもしれません。でも「今のこの道を通れることができないのは、お前しかいないんだ、頼んだぞ」と、親神様が託してくださいっている道中だと思えば、何か、心に力と勇気が湧いてくるんじゃないですか。

私たち一人ひとりに親神様からお掛けくださっているご期待と親心にお応えさせていただきながら、次にバトンを渡すのが、私たちの役目でありませう。「そのとき」になって、一生懸命にやっける「私の信仰」を継いでくれる者がいなければ、寂しい限りであります。

先人が、懸命に通ってきた信仰のバトンを受けて、私たち一人ひとりが、今、この道を歩んでいます。その、私たちの命には限りがあります。つまり、誰もが、信仰のバトンを渡すときが必ず来るのであります。「そのとき」に、「後は頼んだぞ」と、次の者に、安心して、バトンを渡してやりたいじゃないですか。そのためにも、私たちの、まず、この次の世代をしっかりと「育成」することでありませう。これからの道の将来を担っていく次の世代の「育成」に、この旬に、あらためて、力を入れることでありませう。

信仰の喜びを親から子へ、子から孫へと繋いでいく「縦の伝道」は、今の旬の、最も大切な御用の一つとお考

現在、平坦な道を快走するように順調に道を進んでいる教会もあれば、苦心や苦勞をしながら上り坂を息を切らして走っているところもあるでしょう。中には、もう歩くだけでも辛いような、ガタゴト道や砂利道に遭遇している方もおられるかもしれません。でも「今のこの道を通れるのは、お前しかいない、頼んだぞ」と、親神様が託してくださいっている道中だと思えば、何か、心に力と勇気が湧いてくるんじゃないですか。

私たち一人ひとりに親神様からお掛けくださるご期待と親心にお応えしながら、次にバトンを渡すのが、私たちの役目です。「そのとき」になって、一生懸命にやっける「私の信仰」を継いでくれる者がいなければ、寂しい限りです。

先人が、懸命に通ってきた信仰のバトンを受けて、私たち一人ひとりが、今、この道を歩んでいます。その、私たちの命には限りがあります。つまり、誰もが、信仰のバトンを渡すときが必ず来ます。「そのとき」に、「後は頼んだぞ」と、次の者に、安心して、バトンを渡してやりたいではないですか。そのためにも、私たちの、まず、この次の世代をしっかりと「育成」することです。これからの道の将来を担っていく次の世代の「育成」に、この旬に、あらためて、力を入れることとす。

信仰の喜びを親から子へ、子から孫へと繋いでいく「縦の伝道」は、今の旬の、最も大切な御用の一つとお考

えいただいて、どうか、そのための骨折りを決して惜
しまず、大いに工夫をし苦心をして、お取り組みいた
だきたいと思ひます。

教祖にお喜びいただくために

一手一つの和

さて、「諭達」の最後に、

この道にお引き寄せ頂く道の子一同が、教祖の年祭を
成人の節目として、世界たすけの歩みを一手一つに力
強く推し進め、御存命でお働き下さる教祖にご安心頂
き、お喜び頂きたい。

とお述べくださっていますが、この「御存命でお働き
下さる教祖にご安心頂き」たい、「お喜び頂きたい」
とのお言葉に、真柱様の思いが集約されているように、
私自身は感じているのであります。

これにお応えするために、欠いてはならないのは、「一
手一つ」であります。「一手一つ」とは、まず、芯に
なる者が、親神様のお心に添った神一条の心をしっか
りと定めることでもあります。芯の心が定まらないとこ
ろに、「一手一つの和」はできません。そして、関わ
る人々が、芯になる者の心を汲んで、心を結び合い、
それぞれの徳分・個性を活かして、持ち場・立場の役割
を力を合わせて務めきることであります。

「一手一つ」に結べば、どんだけのお働きがいただけ
るのでしよう、現れるのでしょうか。それは、おさしづ
ではつきりと教えてくださっています。

一手一つ理が治まれば日々理が栄える。(明治22・1

えいただいて、どうか、そのための骨折りを決して惜
しまず、大いに工夫をし苦心をして、お取り組みいた
だきたいと思ひます。

教祖にお喜びいただくために

一手一つの和

さて、「諭達」の最後に、

この道にお引き寄せ頂く道の子一同が、教祖の年祭を
成人の節目として、世界たすけの歩みを一手一つに力
強く推し進め、御存命でお働き下さる教祖にご安心頂
き、お喜び頂きたい。

とお述べくださっていますが、この「御存命でお
働き下さる教祖にご安心頂き」たい、「お喜び頂きた
い」とのお言葉に、真柱様の思いが集約されているよ
うに、私自身は感じているのであります。

これにお応えするために、欠いてはならないのは、「一
手一つ」であります。「一手一つ」とは、まず、芯に
なる者が、親神様のお心に添った神一条の心をしっか
りと定めることでもあります。芯の心が定まらないとこ
ろに、「一手一つの和」はできません。そして、関わ
る人々が、芯になる者の心を汲んで、心を結び合い、
それぞれの徳分・個性を活かして、持ち場・立場の役割
を力を合わせて務めきることであります。

「一手一つ」に結べば、どれだけのお働きがいただけ
るのでしよう、現れるのでしょうか。それは、おさしづ
いで、**①**はつきりと教えてくださっています。

②一手一つ理が治まれば日々理が栄える。(明治22・1

えいただいて、どうか、そのための骨折りを決して惜
しまず、大いに工夫をし苦心をして、お取り組みいた
だきたいと思ひます。

教祖にお喜びいただくために

一手一つの和

さて、「諭達」の最後に、

この道にお引き寄せ頂く道の子一同が、教祖の年祭を
成人の節目として、世界たすけの歩みを一手一つに力
強く推し進め、御存命でお働き下さる教祖にご安心頂
き、お喜び頂きたい。

と述べられていますが、この「御存命でお働き下さる
教祖にご安心頂き」たい、「お喜び頂きたい」とのお
言葉に、真柱様の思いが集約されているように、私は
感じています。

これにお応えするために、欠いてはならないのは、「一
手一つ」です。「一手一つ」とは、まず、芯になる者
が、親神様のお心に添った神一条の心をしっかりと定
めることです。芯の心が定まらないところに、「一手
一つの和」はできません。そして、関わる人々が、芯
になる者の心を汲んで、心を結び合い、それぞれの徳
分・個性を活かして、持ち場・立場の役割を力を合わせ
て務めきることであります。

「一手一つ」に結べば、どれだけのお働きがいただけ
るのでしよう、現れるのでしょうか。それは、おさしづ
いで、

一手一つ理が治まれば日々理が栄える。(明治22・1

一手一つの速やかな理をあれば、速やかと治まる。

(明治22・5・19)

一手一つに皆結んでくれるなら、どんな守護もする。

(明治31・1・19)

といったご守護がいただけるのであります。

「一手一つ」に結んで事に当たれば、「日々に理が栄える」・「治まらんところを、速やか治めてやる」・「どんな守護でもしてやる」という親神様のお働きが頂戴できるんであります。

このたびの「諭達」を受けて、笠岡大教会では、年祭活動の方針と具体的な目標を定めてくださいますか、どうか、大教会長さんは心定めて進んでくれるって、そうした心定めをしてくれると思います。どうか、この大教会長さんを心に、「一手一つ」に取り組んでいただきたいと思ひます。

また、この大教会の方針に添って、各教会において年祭活動に掛られますが、会長さん方一人ひとりが、教会の先頭に立って、年祭活動を勤める心をしかと定めて、所属するよふぼく・信者の皆さんと「一手一つ」に心を結んで、時旬の歩みを、心勇んで進んでいただきたいのであります。

そして、この大祭において、年祭活動に取り組む全教よふぼくの芯としてご発布くだされたのが、このたびの「諭達第四号」であります。

この「諭達」に込められた真柱様のお心をしっかりと汲み取らせていただき、この「諭達」の精神に則って、道のをや・真柱様を心に、教会長・よふぼくが「一手一

一手一つの速やかな理をあれば、速やかと治まる。

(明治22・5・19)

一手一つに皆結んでくれるなら、どんな守護もする。

(明治31・1・19)

と、~~いったご守護がいただけるのであります。~~

「一手一つ」に結んで事に当たれば、「日々に理が栄える」・「治まらんところを、速やか治めてやる」・「どんな守護でもしてやる」と、~~いう親神様のお働きが頂戴できるんであります。~~

①このたびの「諭達」を受けて、笠岡大教会では③、年祭活動の方針と具体的な目標を定めてくださいますか、~~どうか、~~②大教会長さんは「心を定めて進む」~~べくんできれあやせ、~~そうした心定めをして~~られて~~④~~も~~と思ひます。④どうか、この大教会長さんを心に、これに「一手一つ」に取り組んでいただきたいと思ひます。

また、この大教会の方針に添って、各教会において年祭活動に掛られますが、会長さん方一人ひとりが、教会の先頭に立って、年祭活動を勤める心をしかと定めて、所属するよふぼく・信者の皆さんと「一手一つ」に心を結んで、時旬の歩みを、心勇んで進んでいただきたいのであります。

そして、~~この大祭において、年祭活動に取り組む全教よふぼくの芯としてご発布くだされたのが、このたびの「諭達第四号」であります。~~

~~この「諭達」に込められた真柱様のお心をしっかりと汲み取らせていただき、この「諭達」の精神に則って、道のをや・真柱様を心に、教会長・よふぼくが「一手一~~

一手一つの速やかな理をあれば、速やかと治まる。

(明治22・5・19)

一手一つに皆結んでくれるなら、どんな守護もする。

(明治31・1・19)

と、「一手一つ」に結んで事に当たれば、「日々に理が栄える」・「治まらんところを、速やか治めてやる」・「どんな守護でもしてやる」と、はっきりと教えられます。

このたびの「諭達」を受けて、笠岡大教会では大教会長さんは「心を定めて進む」べく、そうした心定めをして、年祭活動の方針と具体的な目標を定められますか、どうか、この大教会長さんを心に、これに「一手一つ」に取り組んでいただきたいと思ひます。

また、この大教会の方針に添って、各教会において年祭活動に掛られますが、会長さん方一人ひとりが、教会の先頭に立って、年祭活動を勤める心をしかと定めて、所属するよふぼく・信者の皆さんと「一手一つ」に心を結んで、時旬の歩みを、心勇んで進んでいただきたい。

そして年祭活動に取り組む全教よふぼくの芯として発布されたのが「諭達第四号」ですが、「諭達」に込められた真柱様のお心をしっかりと汲み取り、「諭達」の精神に則って、道のをや・真柱様を心に、教会長・よふぼくが「一手一つ」に心を結んで、年祭活動に勇んで掛かる。——そうすれば、「日々に理が栄える」・「速や

(拍手)

大教会長様 閉講挨拶

閉講にあたり、一言ご挨拶申しあげます。

皆さま、それぞれに、今お聴かせいただいたお話をしっかりと咀嚼し、そして胸に納めていただいたことと思わせていただきます。

いよいよ始まるこの教祖250年祭への年祭活動、まず、この本部巡教を受けて、大教会から3年間の方針、そして目標、これを年内中に発表させていただきますと思います。そしてその後、それぞれの教会でも、目標と実践項目、これを定めて実践していただきたいと思いをします。

今ここにあたって、方針・目標について、私から具体的なことはまだ申せませんが、今、とにかく私の胸にある気持ちは、この三年千日、とにかく勇んで動き続けること、今、自分に何ができるのか、今、何をさしてもらえるのか、それを考え、失敗しながら、とにかく3年間、動き続ける。そのことを、この場ではお伝えさせていただいて、皆さま、一人ひとりにも、私と同じような気持ちになっていただいて、とにかく動き続ける、このことをこの場ではお伝えさせていただきます、今日の閉講の挨拶とさせていただきますと思います。長時間、ありがとうございました。

(拍手)

大教会長様 閉講挨拶

閉講にあたり、一言ご挨拶申しあげます。

皆さま、それぞれに、今お聴かせいただいたお話をしっかりと咀嚼し、そして胸に納めていただいたことと思わせていただきます。

いよいよ始まるこの教祖250年祭への年祭活動、まず、この本部巡教を受けて、大教会から3年間の方針、そして目標、これを年内中に発表させていただきます。そしてその後、それぞれの教会でも、目標と実践項目、これを定めて実践していただきたいと思いをします。

今ここにあたって、現時点では、方針・目標について、私から具体的なことはまだ申せませんが、今、とにかく私の胸にある気持ちは、この三年千日、とにかく勇んで動き続けること、①「今、自分に何ができるのか、今、何をさしてもらえるのか、それを考え、失敗しながら、とにかく3年間、動き続ける。そのことを、この場ではお伝えさせていただきます、皆さま、一人ひとりにも、私と同じような気持ちになっていただくようお願いいたします、このことを、この場ではお伝えさせていただきます、今日の閉講の挨拶とさせていただきます、長時間、ありがとうございました。

《以上、要約》

大教会長様 閉講挨拶

皆さま、それぞれに、今のお話をしっかりと咀嚼し、胸に納められたことと思います。

いよいよ始まる教祖250年祭への年祭活動、まず、この本部巡教を受けて、大教会から3年間の方針・目標を年内中に発表します。その後、それぞれの教会でも、目標・実践項目を定めて実践していただきます。

現時点では、方針・目標について具体的なことは申せませんが、「今、自分に何ができるのかを考え、この三年千日、とにかく勇んで動き続けること」、この、私の胸にある気持ちを、この場ではお伝えし、皆さま、一人ひとりにも、私と同じような気持ちになっていただくようお願いいたします。

《以上、要約》